

茨城県教育財団文化財調査報告第177集

平成12年度 国補道改第12 - 03 - 695 - 0 - 052号

一般県道日立東海線道路改良工事
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

愛宕山古墳

平成13年3月

茨城県大宮土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第177集

平成12年度 国補道改第12 - 03 - 695 - 0 - 052号

一般県道日立東海線道路改良工事
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

あなごやま
愛宕山古墳

平成13年3月

茨城県大宮土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、長期的な展望のもとに、県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、ゆとりある社会の実現をめざして、快適な道路の整備を進めております。

県北部の日立市や隣接する東海村周辺は、常陸那珂港の開港や北関東自動車道の開通により、さらなる交通量の増加が見込まれる地域であります。このため茨城県は、国補道路橋梁改築事業一般県道日立東海線の道路改良工事を実施することといたしました。その道路改良工事地内に愛宕山古墳が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成11年10月から12月までの3か月にわたり愛宕山古墳の発掘調査を実施いたしました。

本書は、愛宕山古墳の調査成果を収録したものであります。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史の理解、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、東海村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤 佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成11年度に発掘調査を実施した、茨城県那珂郡東海村大字石神内宿に所在する愛宕山古墳の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成11年 10月1日～平成11年 12月31日
整理 平成12年 4月1日～平成12年 6月30日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第一課第2班長田所則夫、主任調査員飯島一生、副主任調査員大塚雅昭が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一、首席調査員萩野谷悟の指揮のもと、主任調査員飯島一生が担当した。
- 5 当遺跡から出土した東北系の弥生土器については、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所長鈴木素行氏に御指導をいただいた。
- 6 西大塚1号墳出土の鉄鏃については、日立市郷土博物館副参事佐藤政則氏から御教示いただいた。
- 7 発掘調査及び整理に際し御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +53,400\text{m}$ 、 $Y = +67,240\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c...j, 西から東へ1, 2, 3...0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

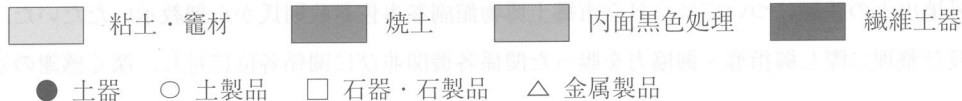
2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 古墳-TM 住居跡-S I 土坑-S K

遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本記録土器-T P

土層 攪乱-K

3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。



4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構は60分の1、または80分の1に縮尺して掲載した。古墳の墳丘・主体部については異なる場合がある。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

6 遺物観察表の記載方法は次の通りである。

(1) 土器の計測値の表示は、口径-A 器高-B 底径-C 高台径-D 高台高-Eとし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率、及びその他必要と思われる事項を記した。

7 「主軸」は、炉を持つ住居の場合は炉の中心と入り口を結んだ軸線を、その他の遺構については、長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E, N-10°-W）。

抄 録

ふりがな	いっばんけんどうひたちとうかいせんどろかいりょうこうじちないまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	一般県道日立東海線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	愛宕山古墳							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第177集							
著者名	飯島一生							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029-225-6587			
発行機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029-225-6587			
発行日	2001(平成13)年3月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
あなごやまこふん 愛宕山古墳	いばらきけん なかぐん 茨城県那珂郡 とうかいむらおおあざいし 東海村大字石 かみうちじゆく ばん 神内宿820番5 ほか	08341- C5	36度 28分 43秒	140度 35分 3秒	20 ~ 21m	19991001 ~ 19991231	2,370m ²	国補道路橋梁 改築事業一般 県道日立東海 線道路改良工 事に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
愛宕山古墳	集落跡	弥生	竪穴住居跡	1軒	弥生土器片 紡錘車 磨製石斧		古墳は直径25m、高さ2.5m程の円墳である。木棺直葬と粘土床の2基の埋葬施設を持つ。弥生時代の住居跡からは十王台式期の土器片が出土している。	
		平安	竪穴住居跡	3軒	土師器(坏・甕) 須恵器(坏・甌)			
	古墳	古墳	円墳	1基	鉄製品(直刀・剣・ 鏃・斧) 石製品(白玉)			
	その他	旧石器 縄文				石核・スクレイパー 縄文土器片 石鏃		

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

挿図目次, 表目次, 写真図版目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構と遺物	11
1 愛宕山古墳	11
2 弥生時代の遺構と遺物	26
(1) 竪穴住居跡	26
(2) 土坑	30
3 平安時代の遺構と遺物	31
4 その他の遺構と遺物	36
5 遺構外出土遺物	37
第4節 まとめ	43

写真図版

插图目次

第1图	愛宕山古墳周辺遺跡分布図……………6	第18图	第1号住居跡出土遺物実測図(1) ……28
第2图	愛宕山古墳調査区設定図……………8	第19图	第1号住居跡出土遺物実測図(2) ……29
第3图	基本土層図……………9	第20图	第1号土坑・出土遺物実測図……………30
第4图	愛宕山古墳遺構全体図……………10	第21图	第2号住居跡・出土遺物実測図……………32
第5图	愛宕山古墳現況図……………12	第22图	第3号住居跡実測図……………33
第6图	愛宕山古墳墳丘実測図……………13	第23图	第3号住居跡出土遺物実測図……………34
第7图	愛宕山古墳墳丘・周溝土層図……………15	第24图	第4号住居跡実測図……………35
第8图	第1主体部実測・遺物出土状況図……………17	第25图	第2号土坑実測図……………36
第9图	第1主体部掘り方……………18	第26图	第3号土坑・出土遺物実測図……………37
第10图	第2主体部実測・遺物出土状況図……………19	第27图	遺構外出土遺物実測図(1) ……37
第11图	第2主体部遺物出土状況図……………20	第28图	遺構外出土遺物実測図(2) ……38
第12图	第2主体部掘り方……………21	第29图	遺構外出土遺物実測図(3) ……39
第13图	第1主体部出土遺物実測図……………22	第30图	遺構外出土遺物実測図(4) ……40
第14图	第2主体部出土遺物実測図……………22	第31图	遺構外出土遺物実測図(5) ……41
第15图	第1・2主体部出土白玉実測図……………23	第32图	愛宕山古墳・西大塚1号古墳 出土遺物実測図……………44
第16图	墳丘内・周溝出土遺物実測図……………25		
第17图	第1号住居跡実測図……………27		

表目次

表1	愛宕山古墳周辺遺跡一覧表……………7
表2	住居跡一覧表……………42
表3	土坑一覧表……………42

写真図版目次

PL1	愛宕山古墳遠景, 墳丘確認状況, 周溝確認状況
PL2	第2主体部確認状況, 第1主体部鉄剣出土状況, 第2主体部土層断面
PL3	第2主体部鉄鏃出土状況, 第1・2主体部完掘状況, 墳丘土層断面
PL4	第1号住居跡完掘状況, 第2号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡遺物出土状況
PL5	第1・2主体部出土遺物(1)
PL6	第1・2主体部出土遺物(2)
PL7	第1・2・3号住居跡, 第3号土坑出土遺物
PL8	第1号住居跡, 墳丘, 周溝, 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、日立市と東海村において国補道路橋梁改築事業一般県道日立東海線の道路改良工事を進めている。

平成10年8月14日、茨城県（大宮土木事務所）は、茨城県教育委員会あてに、一般県道日立東海線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。それを受けて、茨城県教育委員会は、同年9月24日に事業地内の現地踏査を行い、さらに10月1日と11月19日に試掘を行った。その結果、茨城県教育委員会は、茨城県（大宮土木事務所）あてに事業地内（東海村石神内宿）に愛宕山古墳が所在する旨の回答をした。回答を受けた茨城県（土木部）は、平成11年3月3日、茨城県教育委員会あてに愛宕山古墳の取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は、茨城県と取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であることから、平成11年3月26日、茨城県に対し、愛宕山古墳について記録保存のための発掘調査を実施するよう回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成11年10月1日から同年12月31日にかけて、愛宕山古墳の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

愛宕山古墳の発掘調査は、平成11年10月1日から平成11年12月31日までの3か月間実施した。以下、調査の経緯について、その概要を記述する。

10月 初旬に発掘調査を開始するための調査器材の搬入、補助員雇用事務等の諸準備を行った。6日から補助員を投入して、調査区域の伐開作業に取りかかり、土捨て場になる西部から人力と重機によるトレンチ試掘を開始した。13日には、古墳を除く調査区域のトレンチ試掘が終了したため、試掘状況の写真撮影を行った。試掘により竪穴住居跡と思われる遺構を2か所、土坑1基を確認した。試掘により出土した遺物は、中世の土師質土器片と弥生土器片、土師器片少量であった。この時点で、竪穴住居跡は弥生時代のものの可能性が高くなった。また中世の遺物の出土は、北西に対峙する石神城跡との関連をもうかがわせるものであり、中世の遺構も視野に入れながら調査することとした。14日には、墳丘の伐開及び清掃が終了した。墳丘の南東側は、やや削平されたようになだらかな形状に見えた。墳丘からは、少量の弥生土器片とこぶし大の凝灰岩が数点採集された。埴輪は確認されなかった。15日からは、現況の墳丘測量を開始した。同時にトレンチ調査により確認した遺構の周辺と周溝を確認するため重機による表土除去を行った。18日には墳丘の南西で周溝の一部を確認し、墳丘測量も終了した。翌日からは、墳丘の杉や檜の切り株を抜根をしながら旧墳丘と埋葬施設の確認、周溝の掘り込みを実施した。南東部から南西部にかけての周溝は、黒褐色の覆土であるために確認しやすく掘り込みも順調に進んだが、北西部から北部にかけては、住居跡の掘り込みや傾斜による覆土の流失等により、周溝の覆土が確認しにくく、掘り込みに時間を要するようになった。

11月 4日には、土層観察用のベルト部を除く周溝が掘り上がったことから、住居跡の調査を並行して進めた。A～D4本のベルトを残しながら墳頂部から掘り込んだところ、墳頂部からやや南に下がったところで粘

土が露出した。周辺の精査により粘土が広く分布することがわかり、これを埋葬施設とした。しかし、この埋葬施設は墳丘の中央部から外れた位置にあるため、中央部にも埋葬施設が存在する可能性があると考え、墳丘中央部付近をさらに精査した。土層を確認しながら掘り進んだところ鉄製品が出土し、墳頂部に新たな埋葬施設が存在することが明らかになった。この埋葬施設を第1主体部、粘土が検出された方を第2主体部とした。中旬には、埋葬施設の調査を始めると同時に、引き続き住居跡の調査と北東部の周溝の確認作業を実施した。下旬には、住居跡の調査がほぼ終了した。埋葬施設の調査では、白玉、鉄剣、直刀等の副葬品が出土した。

12月 引き続き埋葬施設と土坑の調査を進めるとともに、さらに埋葬施設が存在しないか確認をしながら墳丘の掘り下げを行った。14日には埋葬施設の調査がほぼ終了した。翌日からは、補足調査と墳丘下の遺構確認をするために旧表土下まで掘り下げる作業を進めた。同時に旧石器時代の遺構・遺物の確認をするため、調査区域中央部に調査区を設定して、掘り込みを行った。旧石器時代の遺構や遺物は確認されなかった。墳丘下においては弥生時代の土坑を1基確認したため、調査を実施した。22日には航空写真撮影を行い、遺構調査を終了した。最後に調査区域内の安全対策を施し、現場事務所を撤収した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

愛宕山古墳は、那珂郡東海村大字石神内宿820番5に所在し、久慈川下流右岸の台地縁辺に立地する。

遺跡が立地する台地は那珂台地と呼ばれ、南は那珂川、北は久慈川に挟まれて東西に延びる、標高20m前後の洪積台地である。台地の西部は八溝山系へと続き、東部は太平洋に落ち込む。当遺跡の立地する周辺は、大小の谷がこの台地を刻み込み、台地は細長く樹枝状に連なる様相を示している。谷から広がる低地は、そのまま久慈川河口の沖積低地に連なっている。当遺跡が立地する台地端部の標高は20m、眼下に広がる低地は標高2~3mほどである。古代の久慈川の水量は、『万葉集』の記述や現在の水の使用状況から、現在よりもかなり豊富であったと推測される。さらに灌漑や治水状況を考慮すると、古代の当遺跡周辺の低地は、頻繁に久慈川の氾濫に見舞われていたと考えられる。

地質は、第3紀層である凝灰岩の磯崎層・阿字ヶ浦層を基盤としている。さらに海成層である見和層、那珂川の氾濫により運ばれた土砂の堆積によってできた上市層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。関東ローム層の最上部には赤褐色の軽石層である今市軽石層、黄色軽石と小さな角礫が混在する七本桜軽石層が数cm程度の厚さで見られる。

第2節 歴史的環境

遺跡の分布調査や発掘調査により、東海村をはじめ久慈川流域には、古くから人々が生活を営んでいたことが明らかにされている。

旧石器時代の遺物としては、^{ぶはら}部原古墳〈25〉の埋葬施設の覆土から頁岩を石材とするスクレイパー及びナイフ形石器が出土している。また、墳丘下住居跡の覆土からは、チャートを石材とする細石核が出土している。

縄文時代の久慈川下流域には、^{みなみこうや}南高野貝塚〈1〉や^{おめ}小目貝塚〈2〉、^{ひがしほ}東坪遺跡〈3〉や^{かのえつか}庚塚遺跡〈4〉などの遺跡が多数確認されている。遺跡はさらに中流域の大宮地区や山方地区、上流の八溝山周辺にも分布している。また海進以降は、細浦や真崎浦付近にも^{まきき}真崎貝塚〈5〉や^{ごしやうち}御所内貝塚〈6〉などの遺跡が見られるようになる。

弥生時代の遺跡は、後期後葉の時期とされる十王台式期を中心に数多く確認されている。十王台式土器は、久慈川流域や那珂川、涸沼川流域をその分布の中心としており、遺跡はおもに低地を望む台地上に位置している。久慈川下流域には^{あらく}荒工遺跡（^{いしがみとしやく}石神外宿A遺跡）〈7〉や^{かないど}金井戸遺跡〈8〉、^{うりづらじょう}瓜連城跡遺跡などが、中流域には^{ふじやま}富士山遺跡や^{かじはば}梶巾遺跡などが所在している。遺物は、十王台式土器がほとんどであるが、わずかに東北系の天王山式なども出土している。また、下流の台地上に位置する^{かいご}海後遺跡〈9〉は、口縁に人面を付ける中期の土器が出土したことで知られている。

4世紀になると久慈川流域は、古墳の築造が始まり那珂川流域と共にいち早く、大和朝廷の影響を受けた地域である。古墳は7世紀代まで築造され、下流域から中流域にかけての台地上に密に分布している。久慈川河口近くの左岸に位置する^{ふなとやま}舟戸山古墳〈10〉や、下流域右岸に位置する^{ほんてんやま}梵天山古墳は、全長100mを超える大形の前方後円墳である。これらの古墳の築造は、大和朝廷と当該地方の密接な関係や首長層の権力の大きさを物語

っている。また、久慈川の支流である里川流域には幡山古墳群<11>や峰山古墳群<12>が、さらには玉川流域や山田川流域にも多くの古墳が存在している。

久慈川下流域は古墳と同様、横穴墓の密集地でもある。これらの横穴墓は、左岸の丘陵地や小さな谷に群をなして所在している。横穴墓の性格や古墳との関係については、時期や被葬者等、未だに不明な点も多い。幡山横穴墓群の線刻画等の壁画や赤羽横穴墓群<13>、坂下横穴墓群<14>から出土した装身具や武具、須恵器などはこれらの課題を考える上で貴重な資料である。

愛宕山古墳の所在する東海村域では、古墳群8か所（舟塚古墳群<15>、真崎古墳群<16>、須和間古墳群<17>、下ノ諏訪古墳群<18>、白方古墳群<19>、石神外宿古墳群<20>、中道前古墳群<21>、二軒茶屋古墳群<22>）、単独古墳14基、横穴墓群3か所が確認されている。これらの古墳群は、大きく久慈川流域、細浦沿岸、真崎浦沿岸の3地区に分布している。

古墳の導入時期に前後して須和間古墳群においては、古墳時代以前の墓制の影響によると考えられる方形周溝墓も5基確認されている。当遺跡周辺においては、権現山古墳（前方後円墳、全長87m）<23>や別当山古墳（円墳、直径60m）<24>が古い段階の古墳とされ、検出された埴輪から中期に編年されている。

さらに古墳時代後期になると舟塚古墳群や真崎古墳群、白方古墳群が形成される。舟塚1号墳、二本松古墳、部原古墳、白方古墳群などは調査がされている。部原古墳からは調査により、割竹形木棺の埋葬施設が検出されている。また、耕作や工事により石室が露出したり遺物が出土することも多く、中道前古墳群からは、副葬品と思われる直刀と三輪玉が発見されている。村内の古墳からは、埴輪も多く出土している。中道前古墳群からは、武人像や巫女像など多数の人物埴輪が出土している。また、舟塚1号墳から出土した「手甲をつけた男子埴輪」と動燃東海事業所造成中に出土した「武人埴輪」は、当時の生活や葬送儀礼にかかわる貴重な資料として注目される。

古墳時代の集落跡と思われる土器の散布地は、東海村内だけでも100か所に及ぶといわれており、久慈川周辺の集落跡はかなりの数になる。これらの集落跡は、奈良・平安時代まで続く複合遺跡の場合が多い。発掘調査例も多く、久慈川下流の塚越遺跡（石神外宿B遺跡）<26>や吹上遺跡<27>、中流域の長者屋敷遺跡、真崎浦の奥に位置する小澤野A遺跡<28>等がある。また、細浦の谷奥に位置する馬頭根須恵窯跡<29>は、7世紀後半頃操業されたとされているが、資料も少なく不明な点も多い。

東海村周辺は、大化の改新（645年）以前は那賀国に属し、後に国・評（郡）・里（郷）制がしかれてからは「常陸国那賀郡石上郷」に属していたようである。¹⁾その後、駅馬・伝馬の制がしかれたことにより、現在の東海村白方付近に石橋駅が置かれたと推測されている。²⁾さらに久慈川は、古くから水上交通のルートとして利用されていたことから、東海村周辺は、交通の要衝であったと考えられる。このことを裏付けるかのように律令期の遺跡は、久慈川河口の右岸から、やや遡って那珂・大宮地域まで広く分布している。荒工遺跡や那珂地域の森戸遺跡、北郷C遺跡、さらに上流の長者屋敷遺跡などは発掘調査がなされている。これらの遺跡から出土した鉄製品や腰帯具、墨書土器などは、当時の地方のくらしはもとより、久慈郡や那賀郡、さらには地方と国家との関係を考える上でも重要である。なかでも長者屋敷遺跡から出土した緑釉陶器や灰釉陶器、瓦片や「久寺」と書かれた墨書土器などは、古代の郡衙や郡寺の存在をうかがわせるもので貴重な資料である。

鎌倉時代以降、久慈川南岸から那珂台地一帯は、大掾平氏の吉田氏や馬場氏、一部は鹿島神宮の勢力下にあった。南北朝の動乱以降は、大田郷を中心に勢力をのびた佐竹氏が、その一族を中心に常陸地方の支配を固めた。佐竹氏は、久慈川右岸に額田城や石神城<30>などを、左岸には大橋城<31>や西岡田館<32>など多くの出城を構え、大々名として領地経営を進めていった。その後、佐竹氏の秋田移封から明治維新を迎えるま

で、水戸徳川家が常陸国の大部分を支配することとなる。

註

- 1 東海村史編さん委員会 『東海村史 通史編』 東海村教育委員会 1992年
- 2 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 茨城県 1992年

参考文献

- ・大山年次, 蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 コロナ社 1977年
- ・蜂須紀夫, 大森昌衛 『茨城の地質をめぐって』 築地書館 1979年
- ・東海村史編さん委員会 『東海村史 通史編』 東海村教育委員会 1992年
- ・茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 茨城県 1992年
- ・茨城県史編さん原始古代史部会 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 1974年
- ・池邊彌 『和名類聚抄郡郷里驛名考證』 吉川弘文館 1981年
- ・中山信名 『新編常陸国誌』 崙書房 復刻版 1964年
- ・茨城大学人文学部史学第6研究室 『東海村の遺跡』 東海村教育委員会 1986年
- ・茨城大学人文学部史学第6研究室 『常陸部原古墳』 東海村教育委員会 1990年
- ・茨城大学人文学部史学第6研究室 『常陸白方古墳群』 東海村教育委員会 1993年
- ・茂木雅博 『小澤野』 小澤野遺跡調査会 1978年
- ・赤羽横穴墓群報告書作成委員会 『赤羽横穴墓群』 日立市教育委員会 1987年
- ・日立市埋蔵文化財発掘調査会 「坂下横穴墓群」 『日立市文化財調査報告書』第26集 日立市教育委員会 1991年
- ・大宮町歴史民俗資料館 『大宮町の考古遺物』 大宮町教育委員会 1995年
- ・稲村繁 「茨城における前方後円墳の終焉とその後」 『前方後円墳の終焉とその後』東北・関東前方後円墳研究会 2000年
- ・茨城県教育財団 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書7 二本松古墳 石神外宿A遺跡 石神外宿B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第23集 1983年
- ・茨城県教育財団 「一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 森戸遺跡 北郷C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第55集 1990年
- ・茨城県教育財団 「主要地方道常陸那珂港山方線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 長者屋敷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第117集 1997年



第1図 愛宕山古墳周辺遺跡分布図

表1 愛宕山古墳周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世
◎	愛宕山古墳				○			23	権現山古墳				○		
1	南高野貝塚		○					24	別当山古墳				○		
2	小目貝塚		○					25	部原古墳				○		
3	東坪遺跡		○		○			26	塚越遺跡			○		○	
4	庚塚遺跡		○					27	吹上遺跡		○	○	○	○	
5	真崎貝塚		○			○		28	小野澤A遺跡					○	○
6	御所内貝塚		○		○			29	馬頭根須恵窯跡				○		
7	荒工遺跡			○		○		30	石神城跡						○
8	金井戸遺跡		○	○	○	○		31	大橋城跡						○
9	海後遺跡			○				32	西岡田城跡						○
10	舟戸山古墳				○			33	割山古墳群				○		
11	幡山古墳群				○			34	西大塚古墳群				○		
12	峰山古墳群				○			35	後沢横穴群				○		
13	赤羽横穴群				○	○		36	埜横穴群				○		
14	坂下横穴群				○	○		37	田楽鼻古墳群				○		
15	舟塚古墳群				○			38	水木古墳群				○		
16	真崎古墳群				○			39	吹上古墳群				○		
17	須和間古墳群				○			40	よい塚古墳群				○		
18	下ノ諏訪古墳群				○			41	荒屋遺跡				○		
19	白方古墳群				○			42	平原貝塚		○				
20	石神外宿古墳群				○			43	岡経塚						○
21	中道前古墳群				○			44	真崎城跡						○
22	二軒茶屋古墳群				○			45	座応権現山古墳				○		



第2図 愛宕山古墳調査区設定図

第3章 調査の成果



第1節 遺跡の概要

愛宕山古墳は、東海村の北部に位置し、久慈川を望む標高20~22mの台地の縁辺部に立地している。調査区は、およそ40m×50m、面積2,370㎡である。

今回の調査によって、古墳1基、竪穴住居跡4軒、土坑4基を確認した。古墳は直径25m、高さ2.5mほどの円墳である。墳頂下60cmほどの所に木棺直葬と粘土床の2基の埋葬施設を確認した。埋葬施設からは、直刀や鉄剣、鉄斧、鉄鏃、白玉が出土した。埋葬形態や遺物から5世紀中葉の古墳と考えられる。竪穴住居跡は弥生時代後期後葉（十王台式期）のもの1軒、平安時代（9世紀）のもの3軒を確認した。弥生時代の竪穴住居跡からは、炉跡が確認され、弥生土器片（十王台式期）や紡錘車が出土している。平安時代の竪穴住居跡からは、竈が確認され、土師器（坏・甕）や須恵器（坏・甑）が出土している。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に10箱出土している。遺物の大部分は、住居跡と墳丘から出土した弥生土器片（壺）と土師器、須恵器（坏、甕、甑など）である。その他の遺物として、紡錘車、支脚、磨製石斧、砥石、石製模造品などが出土している。

第2節 基本層序の検討

調査区内(B2e1区)にテストピットを掘り、基本土層を観察した(第3図)。

第1層は、40~50cmの厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

第2層は、褐色をした七本桜軽石層で白色粒子を含んでいる。層厚は10~20cmである。

第3層は、明褐色をした今市軽石層で白色粒子を少量含んでいる。層厚は10~20cmである。

第4層は、明褐色をしたソフトローム層である。層厚は30~40cmである。

第5層は、褐色をしたソフトローム層である。層厚は20~30cmである。

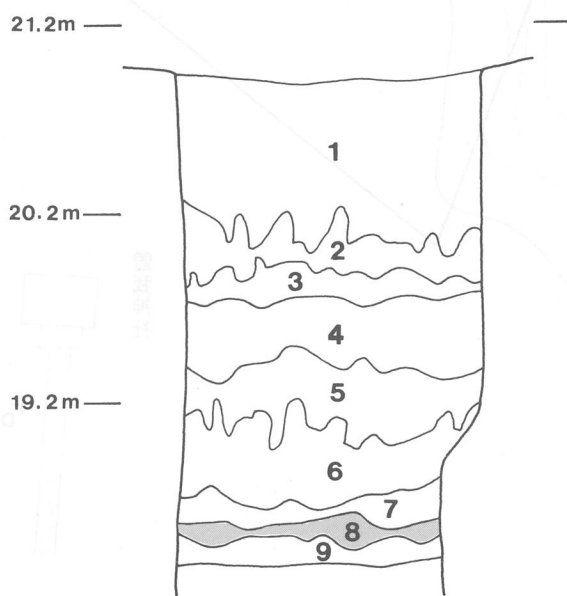
第6層は、暗褐色をしたハードローム層で白色粒子を極少量含んでいる。第2黒色帯に相当すると考えられる。層厚は10~30cmである。

第7層は、褐色をしたローム層で、鹿沼軽石粒子を少量含む。層厚は10cmほどである。

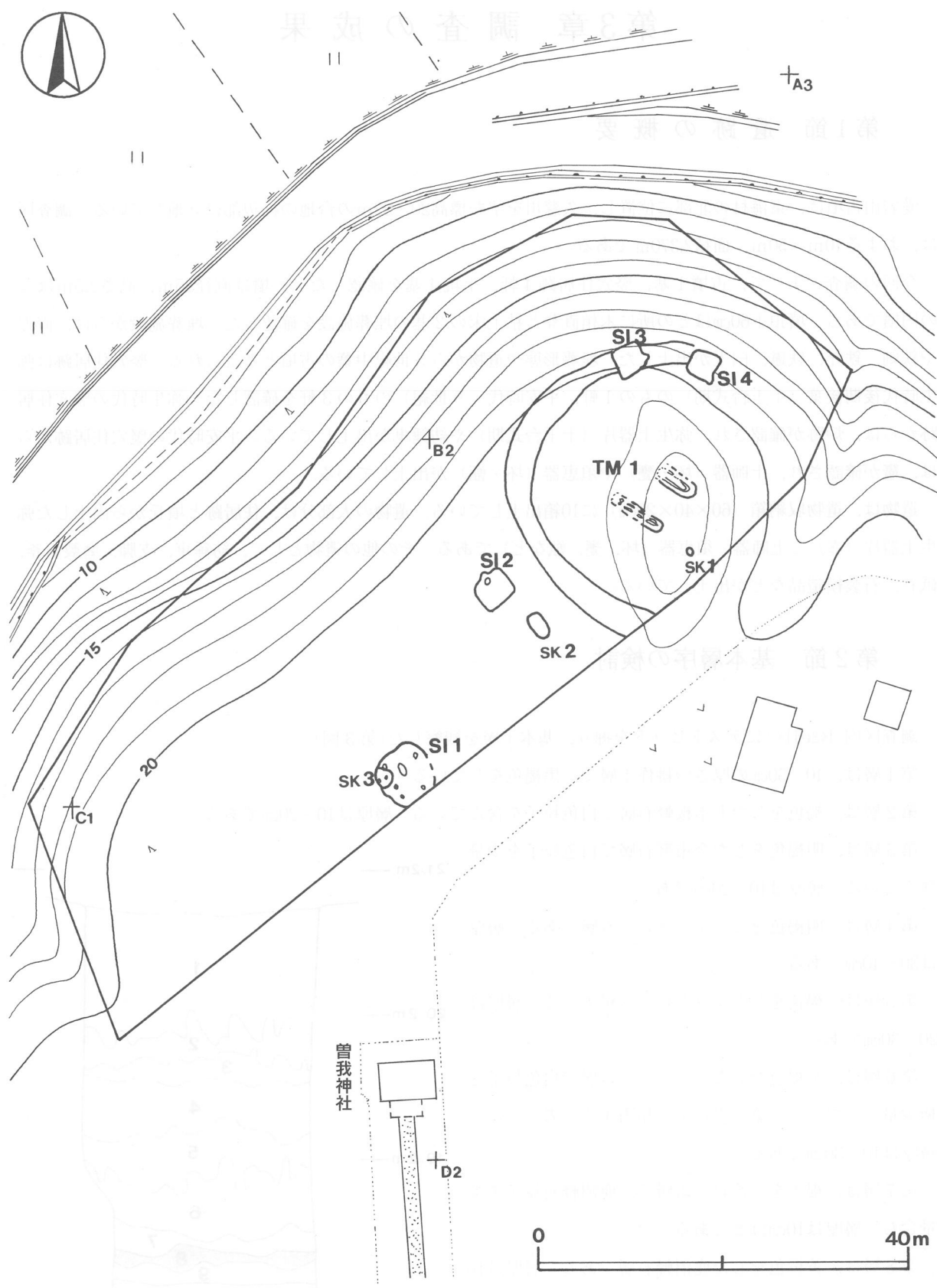
第8層は、黄橙色をした鹿沼軽石層である。層厚は10cmほどである。

第9層は、褐色をしたローム層で、鹿沼軽石粒子を少量と小礫を極少量含んでいる。層厚は10cmほどである。

なお、遺構は、第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 愛宕山古墳遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 愛宕山古墳(第5~16図)

今回の調査により、古墳は2基の埋葬施設を有する円墳であることが確認された。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

立地 古墳は、久慈川を望む那珂台地北端の縁辺部に立地する。標高は約20mで、低地との比高は約18mである。当遺跡の北西1kmには中道前古墳群、さらに北西2kmには石神外宿古墳群が、南東約2kmには白方古墳群、南方約4kmには権現山古墳がある。また、当遺跡の南に接する畑地(中坪遺跡)には、かつて円墳1基が存在したという¹⁾。

現況と確認状況 調査前の現況は、山林と竹林であったため、墳丘の保存状況は比較的良好であった。形状は円墳で、測量調査によれば墳径は23.0mほど、墳丘の高さはおよそ2.0mである。墳丘の中心部にはわずかな平坦面が確認された。墳頂近くの南東部は、攪乱のために他の部分よりも緩やかな傾斜であった。急崖地へ続く北東端部は、一部崩落していた。なお、墳丘の南東部は、一部調査区域外である。

墳丘 円墳である。一部が調査区域外であるため、墳丘の正確な規模は不明である。地形図や平面図、土層断面図から推測すると、墳径は25mほどと考えられる。

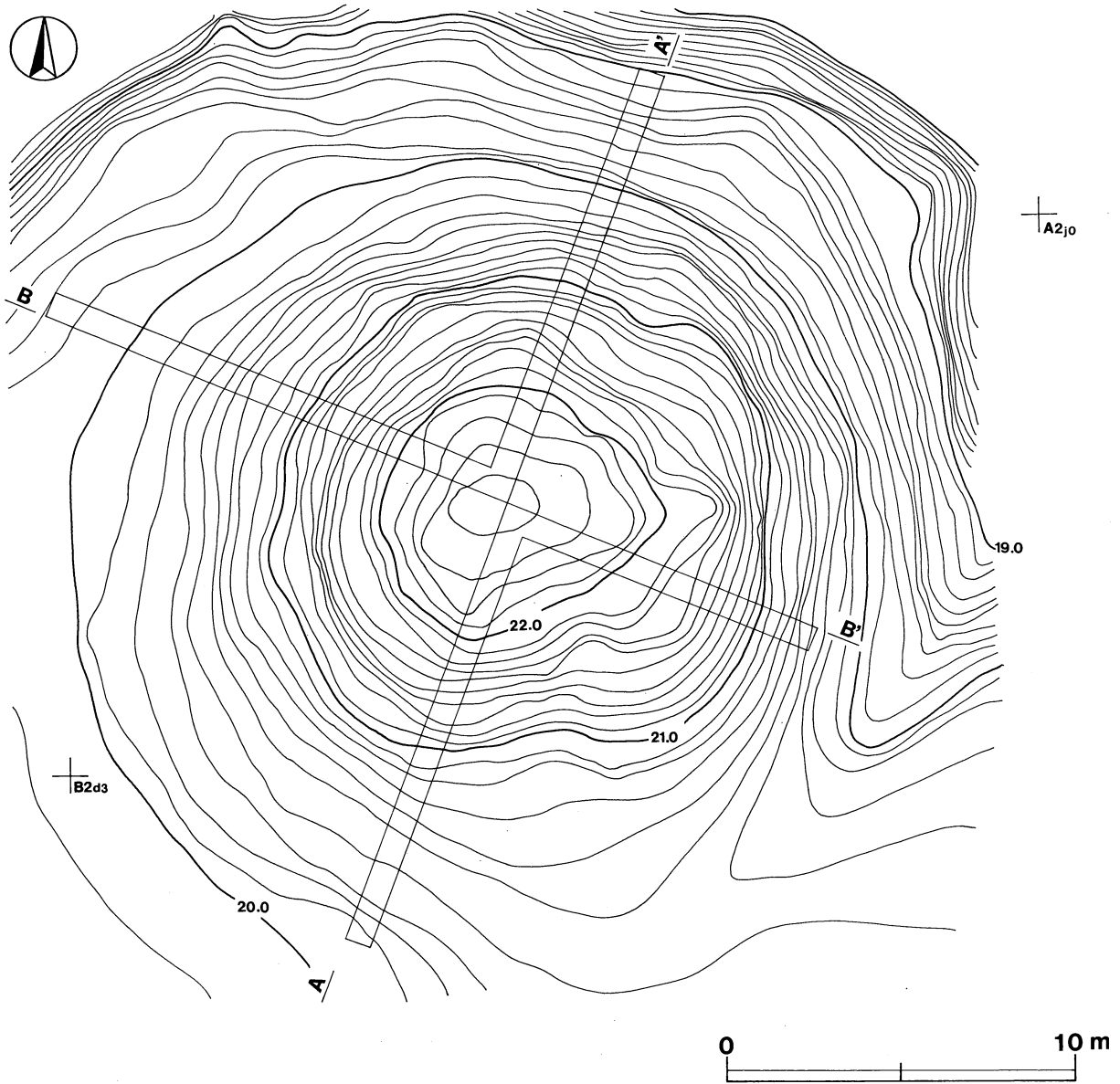
墳丘の高さ(盛土の厚さ)は、約2.0mである。土層断面図中の最下層は、黒褐色を呈する旧表土である。墳丘は、この旧表土の上に盛り土をすることにより築かれている。北東部においては、旧表土とその下層であるローム層を削りだして、墳丘の一部としている。盛土は、第10層や11層のように大きなブロック状の層で、下層から上層へと第29層まで積み上げられている。これらの層は、色調やローム・黒色土等の含有量により明確に分層される。いずれも締まりのある層である。

これら大きなブロック状の層は、第29層まで積み上げられ平坦な面となっている。29層は、埋葬を意識し平坦に整地された層と考えられる。29層より上層は、第1主体部の埋葬後に盛り土された層で、ロームブロックは含まず、下層に比べ締まりのない層である。最上層の40層は、砂粒混じりのローム層で、墳丘全体を覆っている。この層は、後述する周溝の最下層に見られる層と同一層である。

周溝 墳丘の西側半分、墳丘の周囲約2分の1の範囲で検出された。周溝の南端は、調査区域外である南東部へさらに延びるが、ロームが削りだされ低くなっている北東部では検出されなかった。このことから周溝は、全周せずに墳丘の3分の2しか巡っていなかったと考えられる。また西側の一部は、正円ではなく、直線的な形状をしている。規模は上幅1.8~2.3m、下幅0.5~0.8m、深さ0.8~0.9mで、断面形はU字状である。周溝の外側の方が、内側よりも緩やかな傾斜で立ち上がる。土層断面図中、最下層の第1層は墳丘の最上層と同一層で、第4層(SPA~SPA')は表土が周溝外から流れ込んだ層である。したがって、周溝にはまず墳丘の最上層が流れ込み、その後周溝外側の土や墳丘の盛土等が自然に流入・堆積していったと考えられる。

埋葬施設 墳丘を4分割するように土層観察ベルトを設定した。埋葬施設を確認するために、表土を除去した上でこの土層を観察しながら墳頂部から水平に掘り込んでいった。墳丘の中心部からやや南側に寄った部分を20cmほど掘り込んだところでわずかに粘土塊が出土した。周辺の精査をすすめると、広範囲に粘土塊が散乱しており、埋葬施設である可能性が考えられた。粘土塊が存在する北西部と中央部の2か所に大きな攪乱が確認できた。この攪乱層から2点の直刀片と、白玉が出土した。土層観察ベルトには埋葬時の掘り込みが一部見られ、さらに掘り込むと粘土塊がほぼ東西に長い長楕円形として検出された。

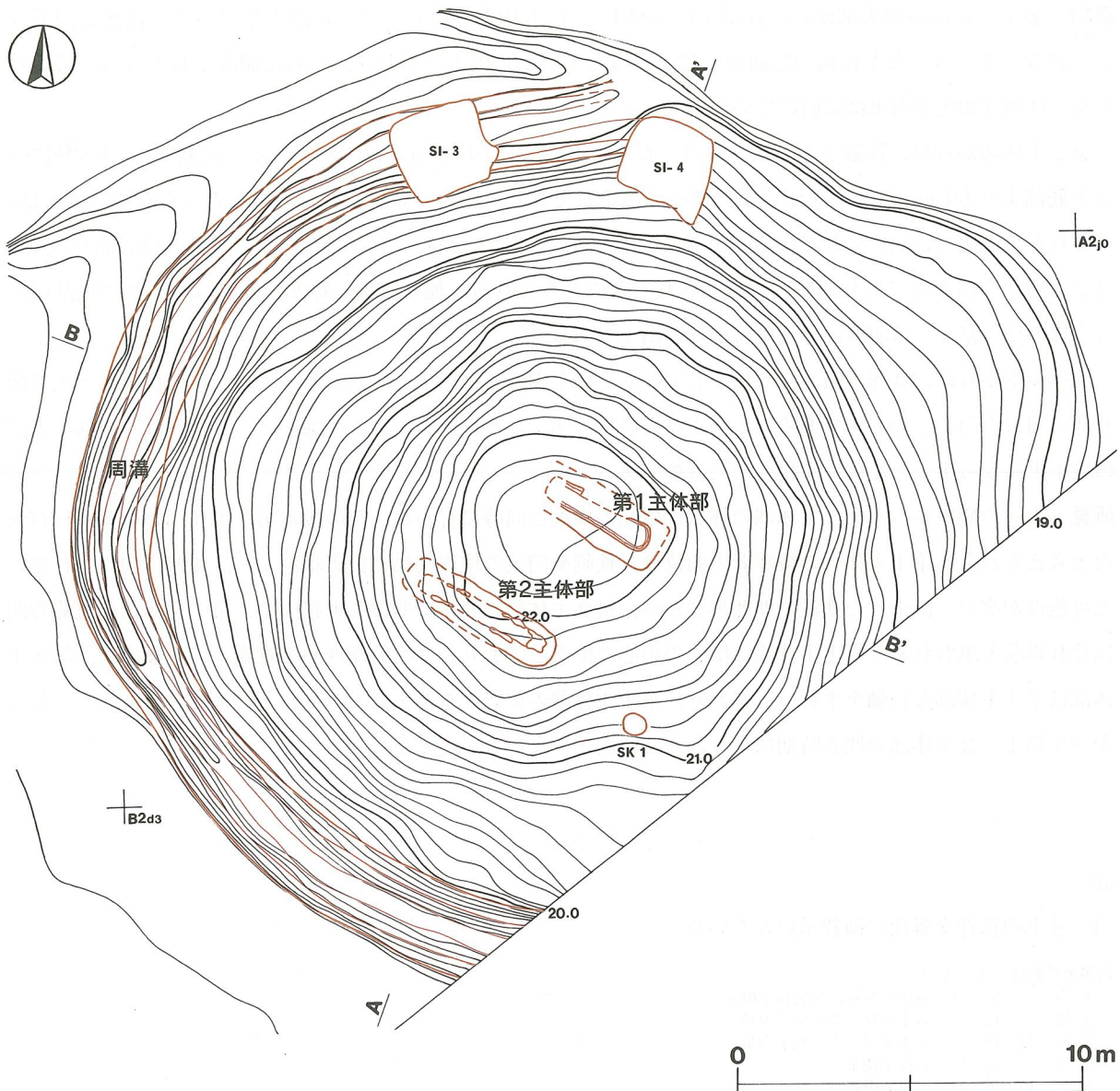
墳丘の中心部付近は、40cmほど掘り込んでも埋葬施設にかかわる掘り込みのプランや粘土等が確認されな



第5図 愛宕山古墳現況図

かったため、ベルトの西部を先行して掘り進んだ。45cmほど掘り込んだところで鉄製品が出土し、同時に土層断面から木棺直葬の埋葬施設があることが確認された。この墳丘中心部で確認した埋葬施設を第1主体部、中心部からやや南に位置する粘土床の埋葬施設を第2主体部とした。

中心部に位置する第1主体部の埋葬形態は、木棺直葬である。平面形は長方形で、確認できた長軸2.8m、短軸0.8m、確認面からの掘り込みは25cmである。底部の形状は、短軸方向でU字状をしている。長軸方向は、N-58°-Wである。掘り方の平面形は隅丸長方形で、長軸(3.2)m、短軸1.4m、確認面からの掘り込みは22~25cmほどである。掘り方の底面は平坦で、主体部の底面とほぼ同一のレベルである。土層の観察から、掘り方を掘った後、木棺の形状に合わせて底部を作り、棺を安置したと考えられる。また、主体部上層の盛土からは掘り込み面が確認されず、掘り込み面が確認されるのは第7図中29層である。この29層は、墳丘を築く段階で平坦に整地され、埋葬が行われた面と考えられる。埋葬の手順としては、29層まで盛り土をして平坦な面を築き、その面を掘り込んで棺を安置した後、その上に盛り土をし、墳丘を完成させたと考えられる。



第6図 愛宕山古墳墳丘実測図

第2主体部は第1主体部の南側に2.5mほど離れ、長軸方向を平行にさせて位置する。埋葬形態は粘土床である。粘土床は、全面に粘土を敷いたものではなく、木棺を安定させるために棺の四方を下から支えるように粘土を巡らせて用いたものである。平面形は長楕円形で、長径 [3.5] m、短径0.4m、確認面からの掘り込みは60cmほどである。底部の断面は短径方向でU字状をしている。長径方向はN-56°-Wである。掘り方の面平面形は長楕円形で、長径4.5m、短径1.4m、確認面からの掘り込みは50~55cmほどである。墳丘面から掘り方を掘り込んだ後、木棺の形状に合わせて底面を作り、さらに粘土で棺を安定させてから、埋め戻したものと考えられる。

遺物 第1主体部の中央部から、鉄剣1口(M1)、白玉10点(Q5~14)が出土している。鉄剣と白玉3点(Q5~7)は、ともに棺の底面から12cmほど上層から出土しており、棺外に副葬されたものと考えられる。鉄剣は切先を南東部に向けている。

第2主体部からは、鉄鏃5本、白玉54点、直刀片1点、刀子片1点が出土している。鉄鏃は粘土床の外側、棺の底部よりも10cmほど上層からまとめて出土しており、棺外に副葬されたものと考えられる。鏃先は、いずれもほぼ北西に向けられている。白玉(Q15~24)と刀子(M11・14)は粘土床の内側、棺底部から5cmほど上層から出土しており、棺内に副葬されたものとみられる。他の白玉(Q25~68)は中央部の攪乱層から、直刀片(M2)は北西部の攪乱層からの出土である。

Dベルトからは、鉄斧(M8)が出土している。盛土内からの出土と思われるが、杉の根の伐根跡と土層観察面の間から出土したものであるため、正確な層位は明示できない。また、土師器埴(P17)は、南部の周溝の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 土層の観察から、第1主体部の埋葬は墳丘の構築と同時に行われ、その後第2主体部の埋葬が行われたと考えられる。第1主体部の被葬者の頭位は、鉄剣や白玉の位置関係や出土状況から、北西に向けられていた可能性が高い。出土した鉄鏃や埋葬形態から、第2主体部の埋葬時期は5世紀中葉、第1主体部の埋葬時期はそれ以前と思われる。第1主体部は墳丘の中心に位置しており、2次的な埋葬を意識していないが、第2主体部は第1主体部と長軸を平行にしており、第1主体部の位置と方位を意識して行われたと考えられる。したがって第1・2主体部の埋葬時期は、それほど時間差がないものと考えられる。

註

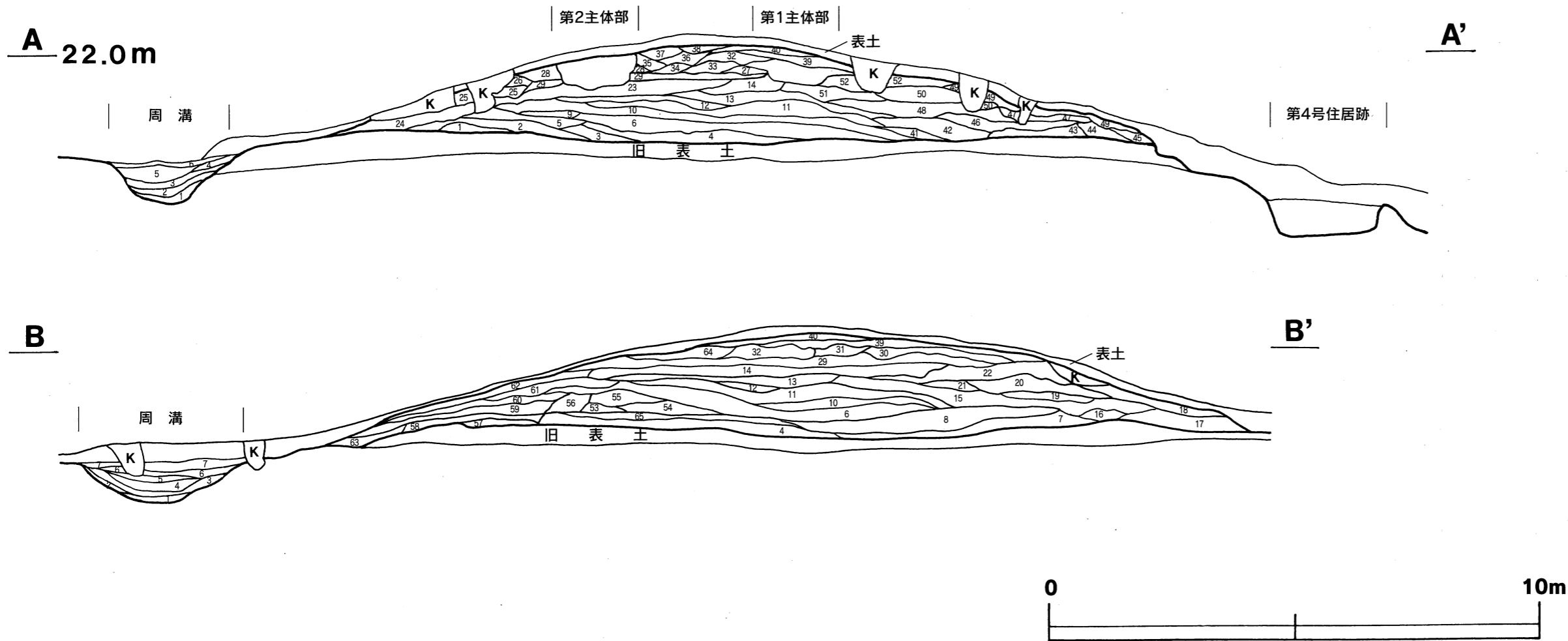
1 地主の秋野文雄氏に御教示いただいた。

周溝土層解説(A~A')

- | | | |
|---|-----|-----------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子多量, 黒色粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 4 | 黒色 | ローム粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子少量 |

周溝土層解説(B~B')

- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子多量, 黒色粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック・粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 | にぶい褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 7 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |



第7図 愛宕山古墳墳丘・周溝土層図

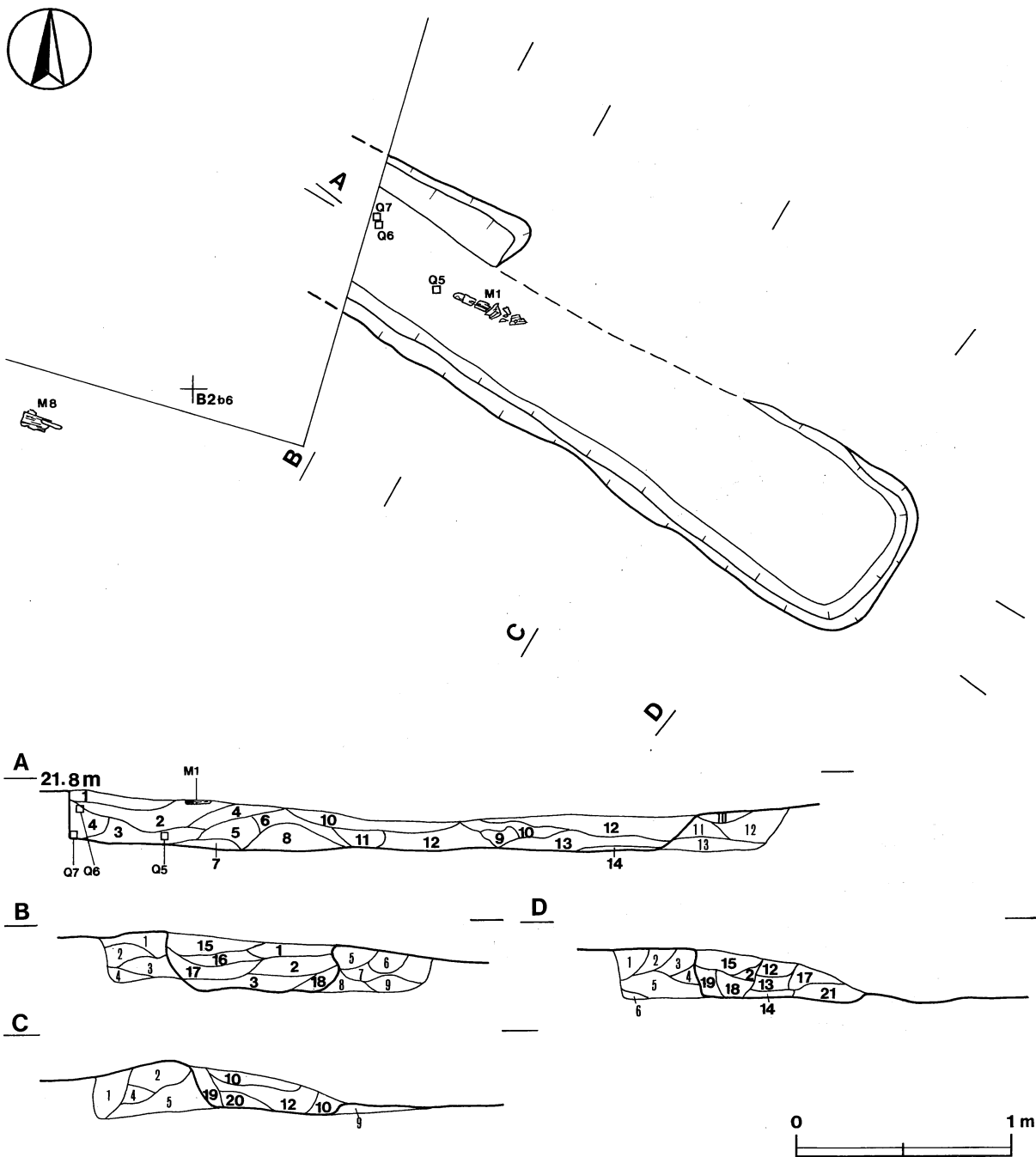
墳丘土層解説 (A~A')

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 明褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 明褐色 ローム中・小ブロック・粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, ローム中ブロック微量
- 10 明褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 11 明褐色 ローム粒子多量
- 12 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 13 橙褐色 ローム粒子多量
- 14 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 23 明褐色 ローム大ブロック多量, ローム小ブロック・粒子少量
- 24 明褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子少量
- 25 黒褐色 黒色粒子多量, ローム粒子微量
- 26 にぶい褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 27 褐色 ローム粒子中量
- 28 褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 29 明褐色 ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック少量, 黒色粒子微量
- 32 極暗褐色 黒色粒子多量
- 33 暗褐色 ローム粒子・黒色粒子少量
- 34 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 35 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 36 明褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 37 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 黒色粒子微量
- 38 黒褐色 ローム粒子・黒色粒子少量
- 39 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 40 褐色 ローム粒子多量
- 41 明褐色 ローム粒子中量

- 42 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム大ブロック・粒子微量
- 43 橙褐色 ローム大ブロック多量
- 44 褐色 ローム粒子少量
- 45 黒褐色 黒色粒子多量, ローム粒子少量
- 46 明褐色 ローム大ブロック多量, ローム中ブロック中量
- 47 褐色 ローム中ブロック・粒子少量
- 48 明褐色 ローム小ブロック・粒子多量, 黒色粒子中量, ローム大ブロック微量
- 49 黒褐色 ローム粒子少量
- 50 明褐色 ローム中・小ブロック少量
- 51 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 黒色粒子微量
- 52 明褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量

墳丘土層解説 (B~B')

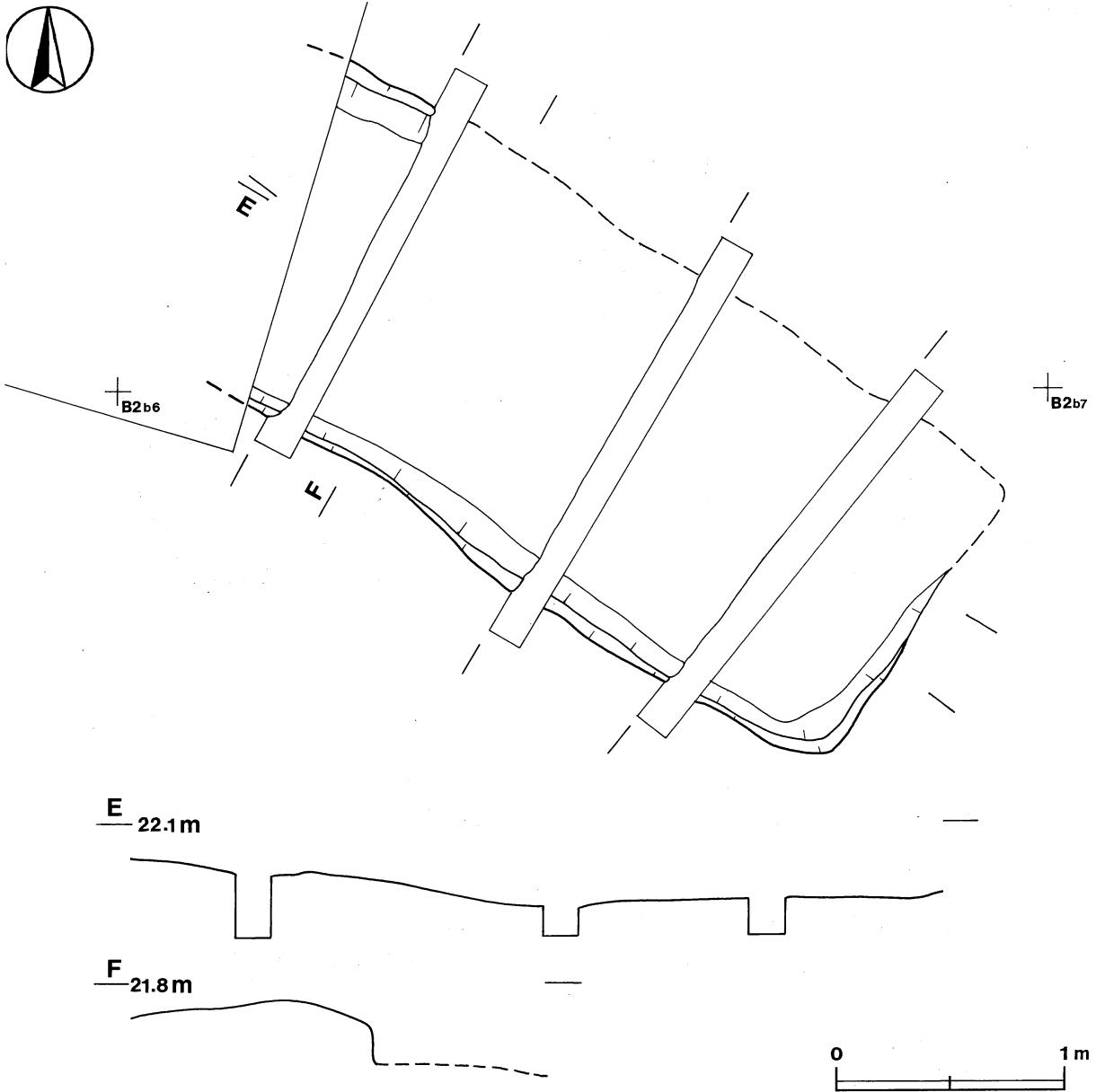
- 7 明褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子中量, 黒色粒子少量
- 8 暗褐色 黒色粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 15 橙褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 16 にぶい褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 17 橙褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子・黒色粒子微量
- 18 明褐色 ローム中・小ブロック多量, ローム粒子少量
- 19 にぶい褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 20 明褐色 ローム粒子少量, 黒色粒子微量
- 21 黒褐色 ローム粒子少量
- 22 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色粒子微量
- 30 明褐色 ローム粒子多量, 黒色粒子微量
- 31 明褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 39 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 53 褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 黒色粒子微量
- 54 褐色 ローム大ブロック中量, ローム中・小ブロック少量
- 55 褐色 ローム中ブロック少量, ローム大・小ブロック・炭化粒子微量
- 56 褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 57 暗褐色 ローム粒子少量
- 58 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 59 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム中・小ブロック少量
- 60 暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 61 褐色 ローム中ブロック少量, ローム大・小ブロック微量
- 62 褐色 ローム粒子中量
- 63 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 64 明褐色 ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック少量
- 65 褐色 ローム粒子中量, ローム粒子少量



第8図 第1主体部実測・遺物出土状況図

第1主体部土層解説

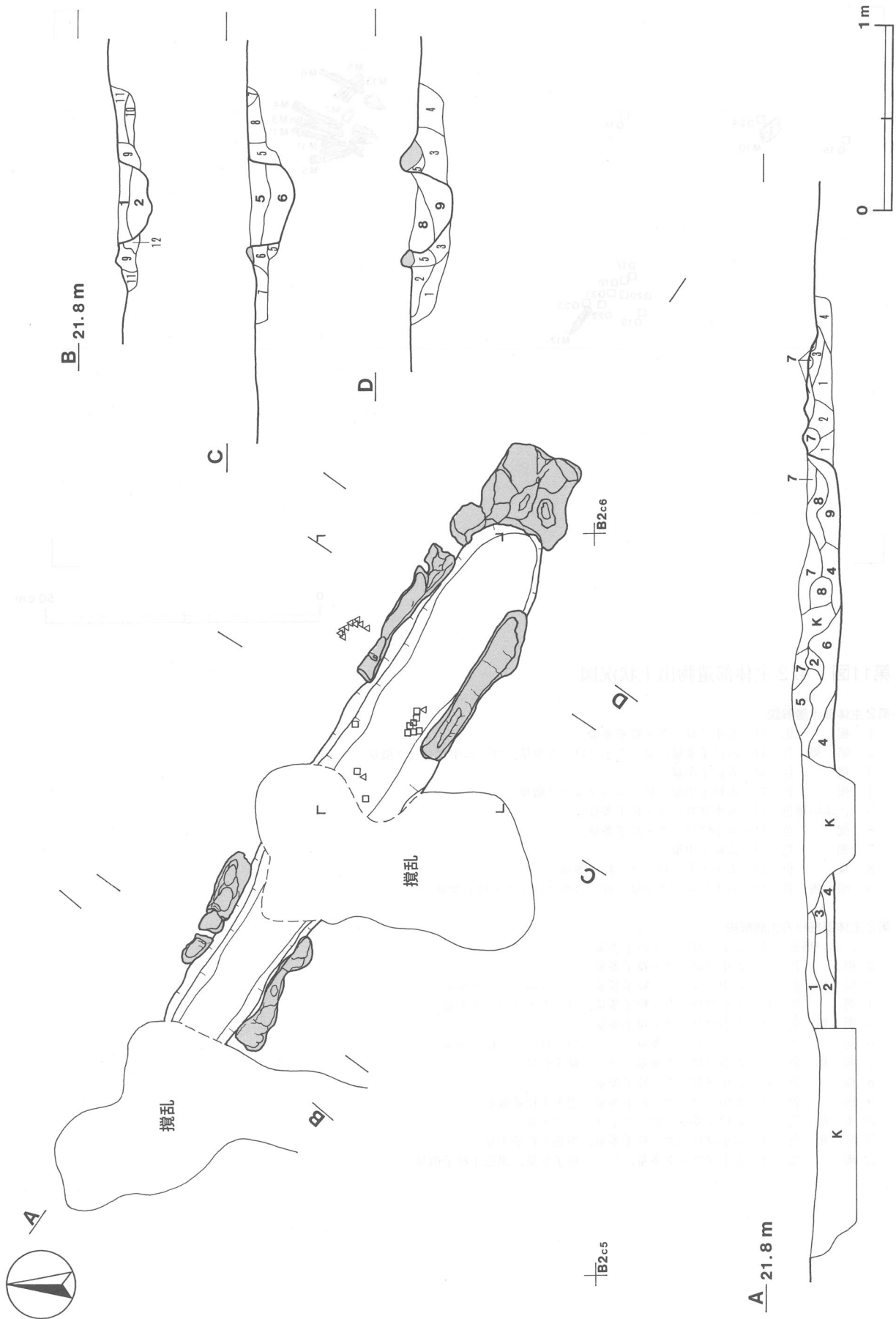
- | | | | |
|---------|---------------------------------|----------|---------------------------|
| 1 橙 色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子多量 | 11 褐 色 | ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量 |
| 2 明 褐 色 | ローム小ブロック・粒子多量 | 12 褐 色 | ローム小ブロック多量, ローム粒子少量 |
| 3 褐 色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 | 13 暗 褐 色 | 黒色土中量, ローム小ブロック・粒子少量 |
| 4 橙 色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック・黒色土少量 | 14 明 褐 色 | ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック少量 |
| 5 褐 色 | ローム小ブロック・粒子多量 | 15 にぶい褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量 |
| 6 褐 色 | ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック・黒色土粒子少量 | 16 黄 橙 色 | ローム小ブロック・粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 7 褐 色 | ローム中・小ブロック少量 | 17 明 褐 色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| 8 明 褐 色 | ローム小ブロック・黒色土粒子多量, ローム中ブロック・粒子少量 | 18 橙 色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量 |
| 9 明 褐 色 | ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック少量 | 19 明 褐 色 | ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量 |
| 10 橙 色 | ローム中・小ブロック多量, ローム粒子少量 | 20 明 褐 色 | ローム小ブロック・粒子少量 |
| | | 21 明 褐 色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック微量 |



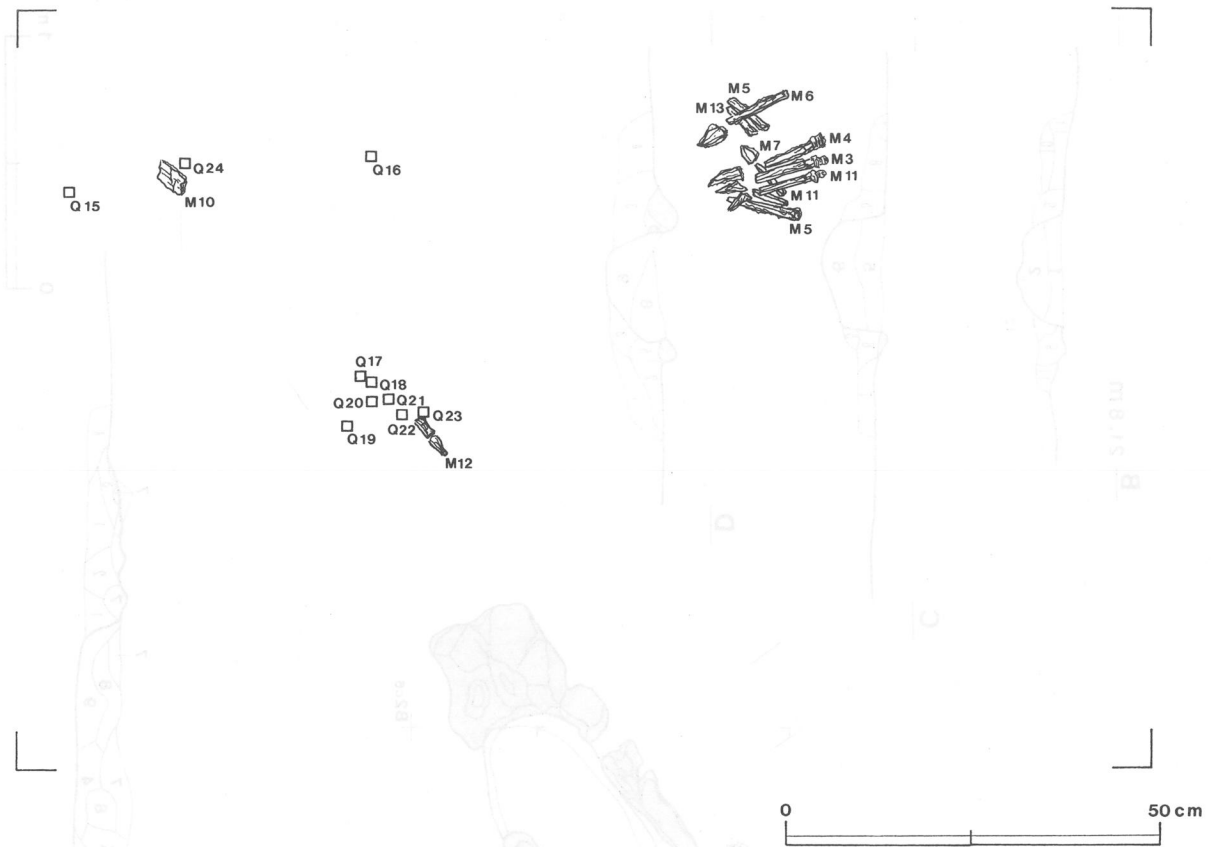
第9図 第1主体部掘り方

第1主体部掘り方土層解説

- 1 明 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量
- 2 褐色 ローム中ブロック・粒子多量
- 3 橙色 ローム中ブロック多量, ローム小ブロック・粒子少量
- 4 暗 褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・粒子少量, 黒色土粒子微量
- 5 におい橙色 ローム小ブロック・粒子多量
- 6 におい褐色 ローム小ブロック・粒子多量, ローム中ブロック微量, 黒色土粒子少量
- 7 明 褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子中量, 黒色土少量
- 8 暗 褐色 黒色土多量, ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 9 橙色 ローム小ブロック・粒子多量
- 10 におい褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 11 橙色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子・黒色土粒子微量
- 12 明 褐色 ローム中・小ブロック多量, ローム粒子少量
- 13 におい褐色 ローム小ブロック・粒子多量



第10図 第2主体部実測・遺物出土状況図



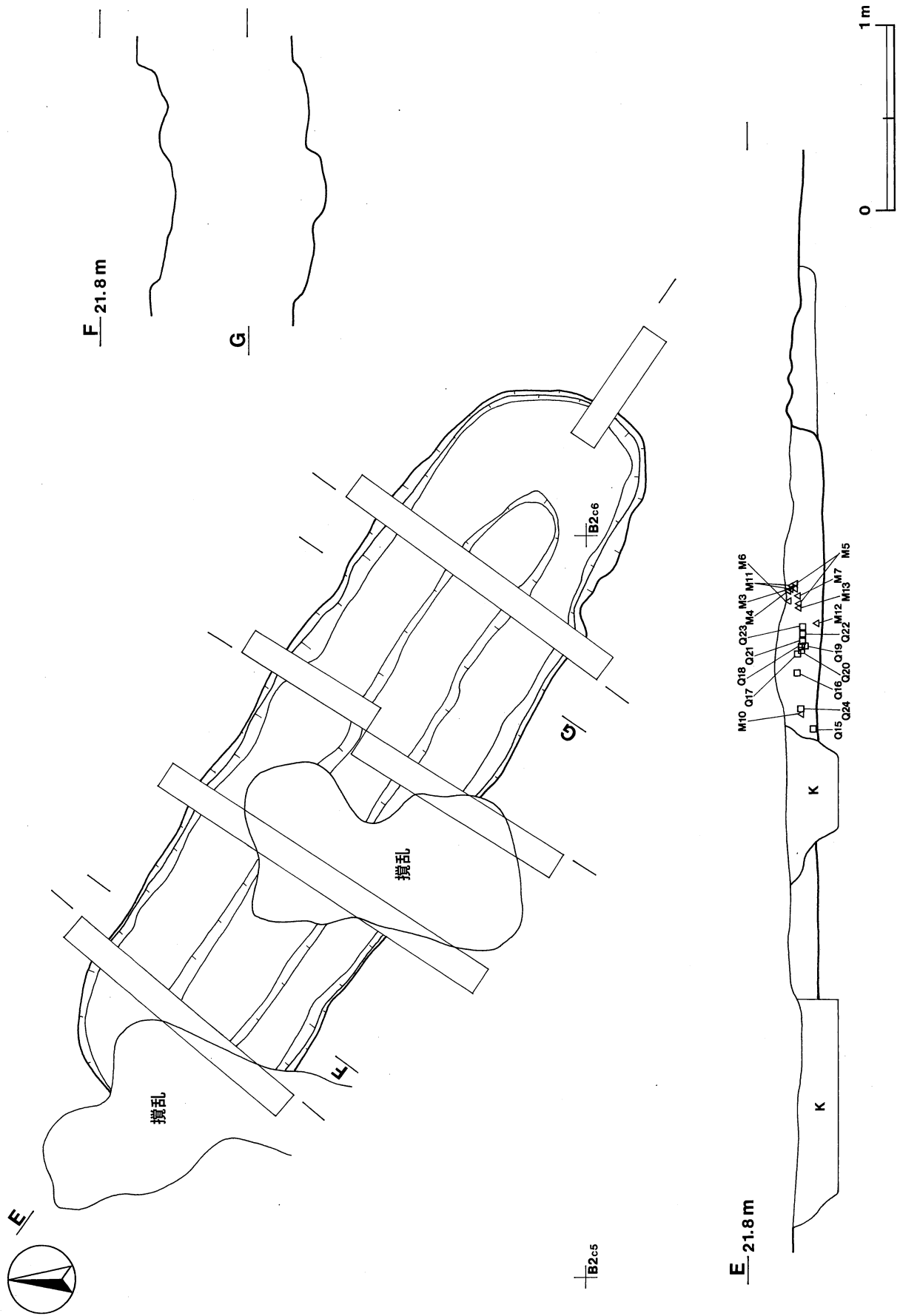
第11図 第2主体部遺物出土状況図

第2主体部土層解説

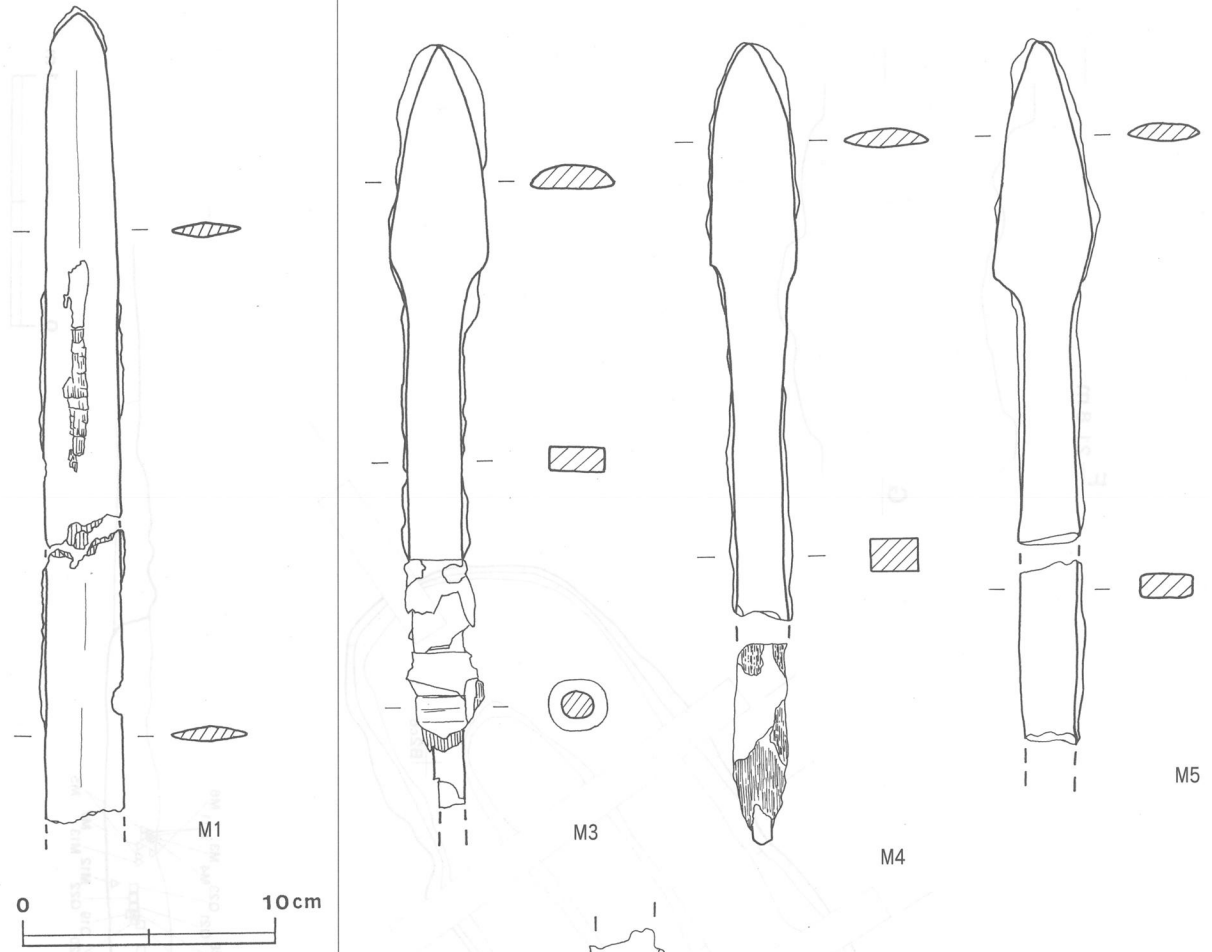
- 1 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 5 にぶい褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 6 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 7 褐色 ローム粒子中量
- 8 褐色 ローム中・小ブロック・粒子多量
- 9 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・粒子少量

第2主体部掘り方土層解説

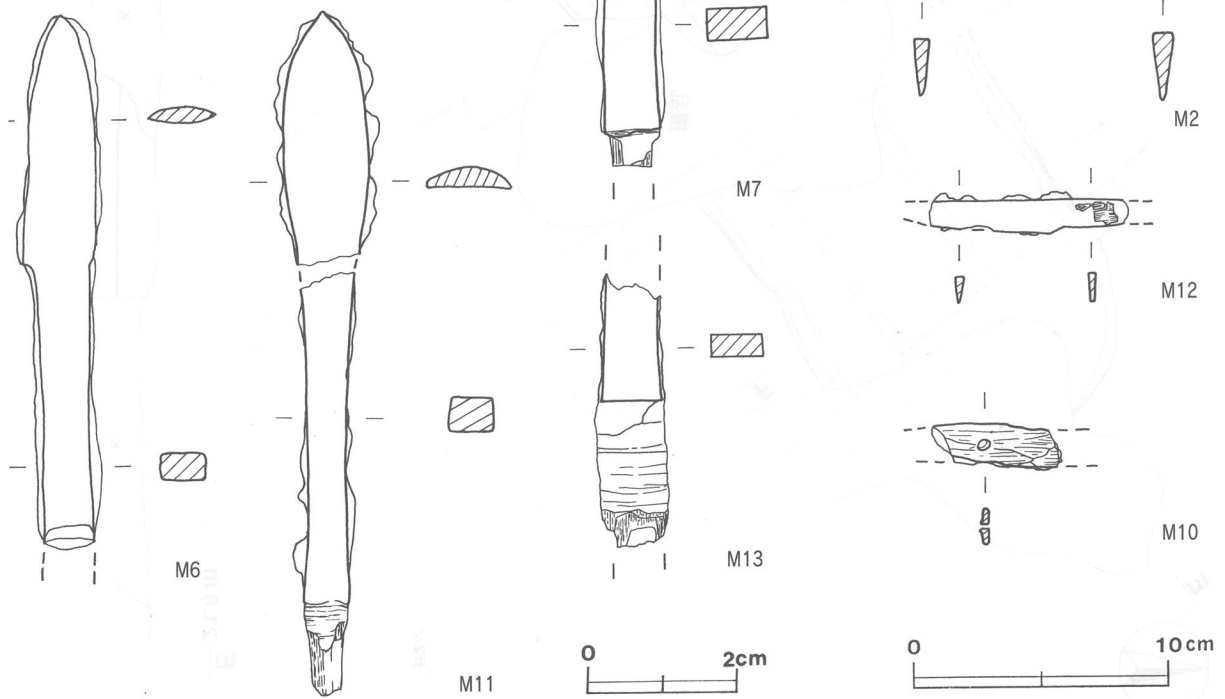
- 1 にぶい褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 2 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・粒子多量, ローム大ブロック少量
- 5 明褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 6 褐色 ローム小ブロック多量, ローム中ブロック・粒子少量
- 7 明褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子少量
- 8 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 9 褐色 ローム小ブロック・粒子多量, 黒色土粒子微量
- 10 明褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量, 黒色土粒子中量
- 12 褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子少量, 黒色土粒子微量



第12図 第2 主体部掘り方



第13图 第1主体部
出土遺物実測図



第14图 第2主体部出土遺物実測図

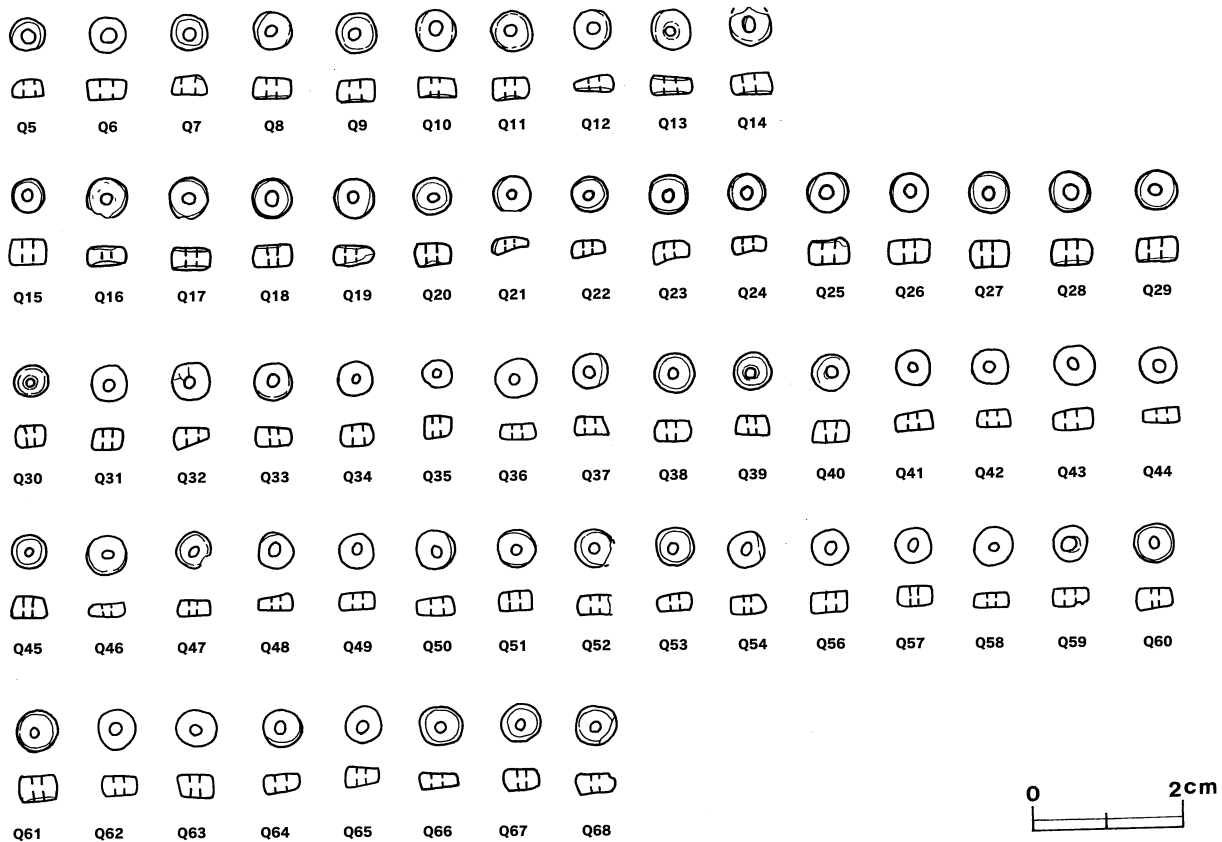
第1 主体部出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm・g)					備考
		全長	剣身長	剣身幅	剣身重ね	重量	
第13図M1	鉄剣	(32.2)	(32.2)	3.1	0.6	(97.0)	茎欠損。剣身に木質部一部残存。PL5

第2 主体部出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm・g)							備考
		全長	刀身長	刀身幅	刀身重ね	茎長	茎幅	重量	
第14図M2	直刀	(13.9)	(13.9)	2.8	0.7	—	—	(78.0)	刀身に木質部一部残存。攪乱層から出土。PL5
M10	刀子	(5.1)	—	—	—	(5.1)	1.6	(4.10)	不明鉄器。目釘穴、茎に木質部一部残存。PL5
M12	刀子	(7.8)	(7.8)	1.3	0.3	—	—	(7.20)	茎に木質部一部残存。PL5

図版番号	器種	計測値 (cm・g)								備考
		全長	鍔身長	鍔身幅	鍔被部長	鍔被部幅	茎長	厚さ	重量	
第14図M3	鉄鍔	(10.1)	3.2	1.3	3.6	0.7	(3.3)	0.3	(8.55)	長頸鍔、口巻き部残存 PL5
M4	鉄鍔	(10.3)	3.1	1.1	4.6	0.7	(2.6)	0.4	(5.45)	長頸鍔、PL5
M5	鉄鍔	(9.1)	3.3	1.3	(5.8)	0.7	—	0.3	(6.89)	長頸鍔、PL5
M6	鉄鍔	(7.1)	3.3	0.9	(3.8)	0.6	—	0.4	(4.88)	長頸鍔、PL5
M7	鉄鍔	(3.8)	—	—	(3.3)	0.7	(0.5)	0.4	(4.02)	PL5
M11	鉄鍔	(8.9)	(3.3)	1.1	(4.3)	0.6	(1.3)	0.5	(6.68)	長頸鍔、口巻き部残存 PL5
M13	鉄鍔	(3.6)	—	—	(1.8)	0.7	(1.8)	0.3	(3.28)	口巻き部残存 PL5

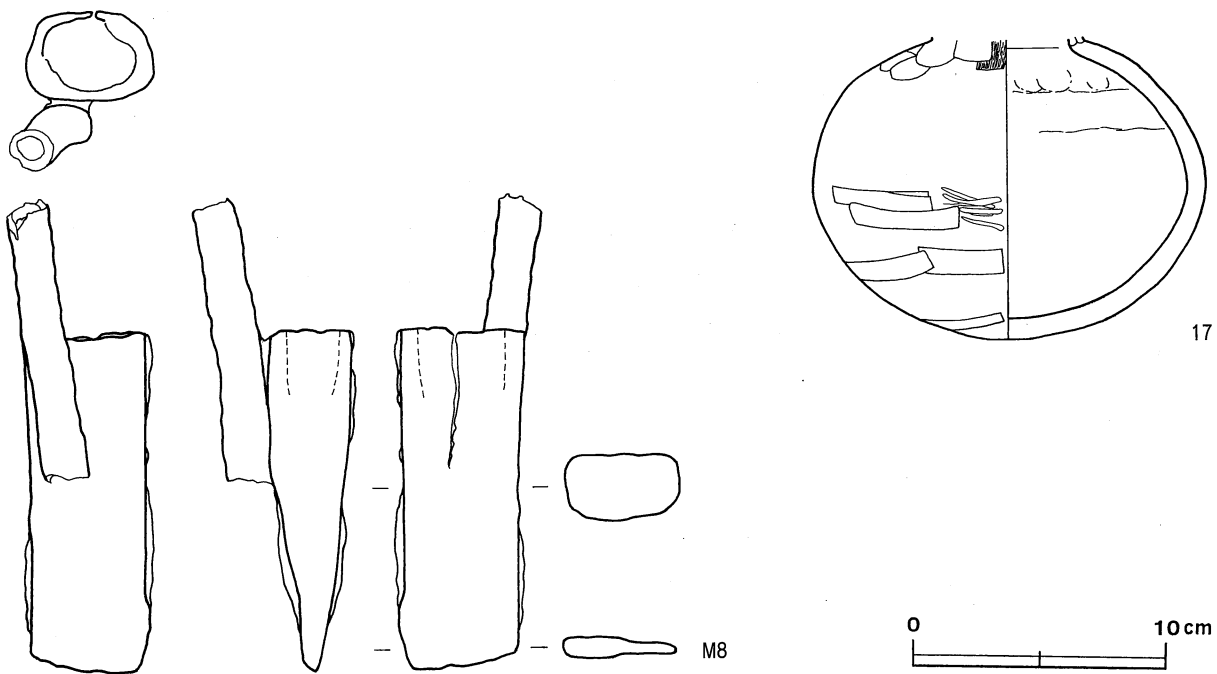


第15図 第1・2 主体部出土白玉実測図

第1・2主体部出土白玉観察表

図版番号	器種	計測値 (cm・g)				石質	色調	備考
		外径	孔径	厚さ	重量			
第15図Q5	白玉	0.45	0.20	0.25	0.08	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q6	白玉	0.50	0.20	0.25	0.08	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q7	白玉	0.45	0.20	0.25	0.08	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q8	白玉	0.50	0.15	0.25	0.11	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q9	白玉	0.50	0.15	0.30	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q10	白玉	0.50	0.15	0.30	0.11	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q11	白玉	0.50	0.15	0.30	0.11	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q12	白玉	0.50	0.15	0.20	0.07	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q13	白玉	0.50	0.15	0.25	0.09	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q14	白玉	0.55	0.15	0.30	(0.10)	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q15	白玉	0.45	0.15	0.35	0.10	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q16	白玉	0.45	0.15	0.25	(0.09)	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q17	白玉	0.50	0.15	0.30	0.10	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q18	白玉	0.50	0.15	0.30	0.12	滑石	暗緑灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q19	白玉	0.55	0.15	0.30	0.09	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q20	白玉	0.50	0.15	0.35	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q21	白玉	0.50	0.15	0.20	(0.08)	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q22	白玉	0.45	0.15	0.25	0.10	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q23	白玉	0.50	0.15	0.30	0.12	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q24	白玉	0.45	0.15	0.25	0.09	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q25	白玉	0.50	0.15	0.35	0.13	滑石	暗緑灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q26	白玉	0.50	0.15	0.30	0.13	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q27	白玉	0.50	0.15	0.35	0.14	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q28	白玉	0.50	0.15	0.35	0.14	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q29	白玉	0.50	0.15	0.30	0.15	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q30	白玉	0.45	0.15	0.30	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q31	白玉	0.45	0.10	0.25	0.10	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q32	白玉	0.50	0.15	0.30	0.09	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q33	白玉	0.50	0.15	0.25	0.11	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q34	白玉	0.45	0.15	0.25	0.12	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q35	白玉	0.40	0.10	0.25	0.08	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q36	白玉	0.50	0.15	0.20	0.10	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q37	白玉	0.40	0.10	0.25	0.11	滑石	暗緑灰	PL6
Q38	白玉	0.50	0.15	0.30	0.13	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q39	白玉	0.50	0.15	0.25	0.13	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q40	白玉	0.50	0.15	0.30	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q41	白玉	0.45	0.10	0.25	0.11	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q42	白玉	0.45	0.15	0.20	0.11	滑石	オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q43	白玉	0.50	0.15	0.25	0.12	滑石	暗緑灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q44	白玉	0.50	0.10	0.20	0.08	滑石	オリーブ灰	PL6
Q45	白玉	0.45	0.10	0.30	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q46	白玉	0.50	0.10	0.20	0.09	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q47	白玉	0.40	0.10	0.25	(0.09)	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q48	白玉	0.45	0.10	0.20	0.08	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q49	白玉	0.45	0.15	0.25	0.09	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q50	白玉	0.50	0.15	0.25	0.09	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q51	白玉	0.45	0.15	0.25	0.10	滑石	暗オリーブ灰	PL6

図版番号	器種	計測値 (cm・g)				石質	色調	備考
		外径	孔径	厚さ	重量			
第15図Q52	白玉	0.50	0.15	0.25	(0.09)	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q53	白玉	0.45	0.15	0.25	0.11	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q54	白玉	0.45	0.15	0.25	0.10	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q56	白玉	0.45	0.15	0.30	0.12	滑石	暗緑灰	位置を変え2回穿孔。側面に膨らみ。PL6
Q57	白玉	0.45	0.15	0.25	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q58	白玉	0.50	0.15	0.20	0.09	滑石	オリーブ灰	PL6
Q59	白玉	0.45	0.15	0.25	0.10	滑石	オリーブ灰	位置を変え2回穿孔。側面に膨らみ。PL6
Q60	白玉	0.50	0.10	0.25	0.12	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q61	白玉	0.50	0.10	0.30	0.11	滑石	暗緑灰	PL6
Q62	白玉	0.45	0.10	0.25	0.10	滑石	暗オリーブ灰	側面に膨らみを持つ。PL6
Q63	白玉	0.50	0.10	0.30	0.13	滑石	オリーブ灰	PL6
Q64	白玉	0.50	0.15	0.25	0.11	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q65	白玉	0.50	0.15	0.30	0.11	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q66	白玉	0.50	0.10	0.20	0.10	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q67	白玉	0.45	0.15	0.30	0.15	滑石	暗オリーブ灰	PL6
Q68	白玉	0.50	0.15	0.25	(0.09)	滑石	暗オリーブ灰	PL6



第16図 墳丘内・周溝出土遺物実測図

墳丘内出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm・g)				備考
		全長	幅	厚さ	重量	
第16図M8	鉄斧	13.6	5.1	3.6	502.0	墳丘から出土。付着している棒状鉄製品は別個体。鉄製品の種別は不明。PL8

周溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 17	埴土器	B(11.5)	口縁部欠損。丸底。体部はやや扁平な球形で、中位に最大径を持つ。	体部外面上部ハケ目調整後ナデ、下部磨き後、一部横ナデ。	長石・石英・雲母 橙色、普通	30% PL8

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、弥生時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基が確認された。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第17・18・19図）

位置 調査区の南部，B1h0区。

重複関係 本跡が第3号土坑の上部を掘り込んで構築されているので，本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸5.10m，短軸4.60mの隅丸長方形である。東部には，耕作による攪乱がみられる。

主軸方向 N—5°—W

壁 壁高は15～25cmで，外傾して立ち上がる。

床 ローム質で若干の起伏が見られる。第3号土坑の上面の床は締まりがなく，ロームと黒色土がブロック状に散在し，貼り床状である。炉の周辺は，硬く踏みしめられている。東部の床面は，攪乱を受けている。

炉 中央からやや北寄りに位置し，長径88cm，短径58cmの楕円形で，床面を9cmほど掘り込んだ地床炉である。長軸は住居の主軸に一致する。炉床は火熱により赤変硬化したロームが，ブロック状に散在している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，ローム小ブロック・粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量

ピット 6か所（P1～P6）。P1～P3は各コーナーに偏って位置し，P4・P5はP2とP3の間に位置する。P1・P3は長径31cm，短径25cmの楕円形で，P1の深さは50cm，P3の深さは70cmである。P2・P4・P5は径20cmの円形で，深さは70cmである。P1～P5は，位置や規模から主柱穴と考えられる。P6は径18cmの円形，深さ33cmで，南東壁寄りの中央に位置していることから，出入口施設に伴うピットと思われる。

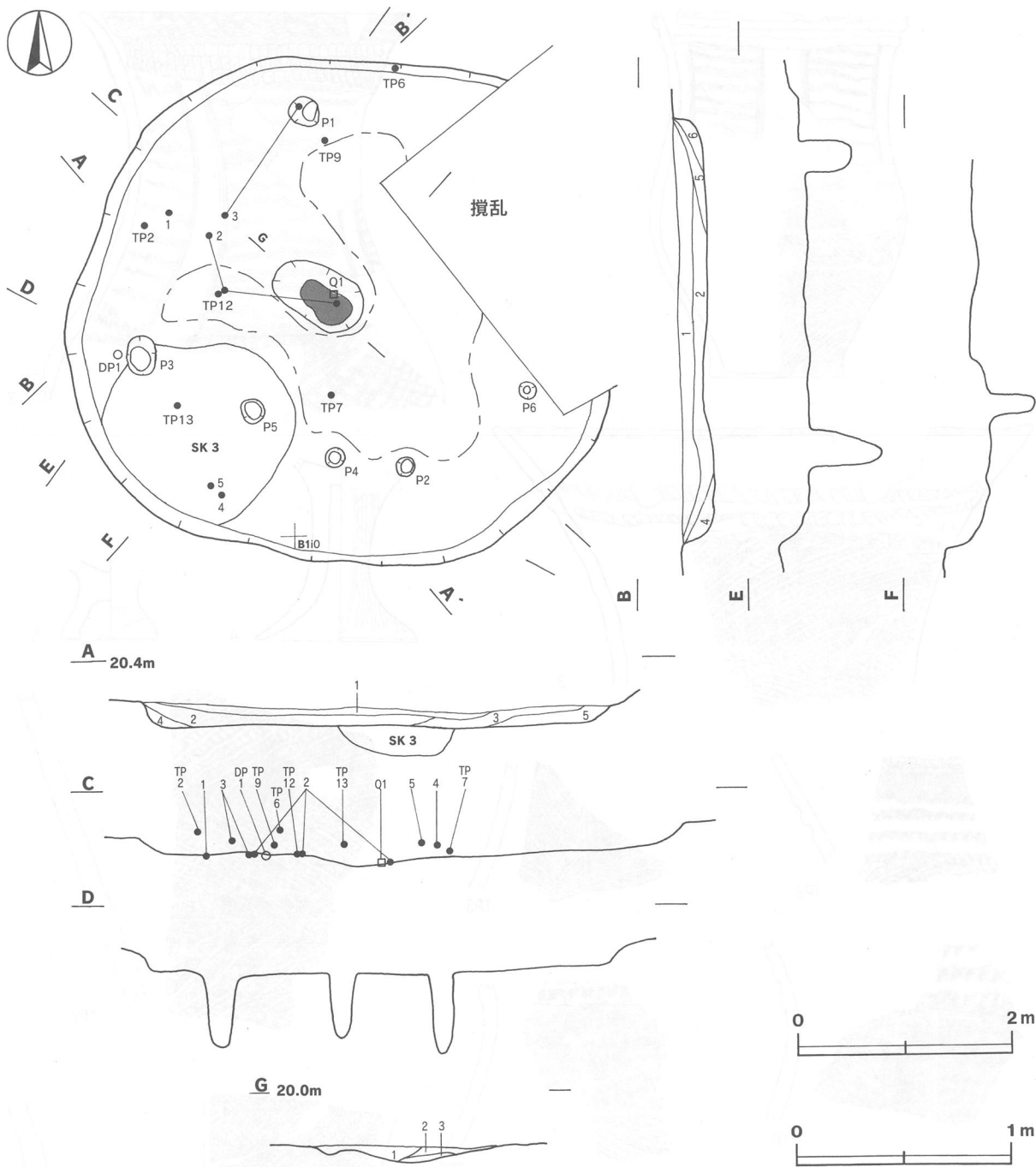
覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子少量

遺物 弥生土器片297点，土製品（紡錘車）1点，石製品（敲石）1点，須恵器片5点が出土している。弥生土器片の多くは胴部の細片で，炉周辺及び北西壁付近から多く出土している。1の広口壺は北西壁寄りの床面から，2・3の広口壺は炉から北西壁にかけての床面から，いずれも破片の状態出土している。4・5の高坏は，南西壁寄りの覆土上層から出土している。DP1の紡錘車は，P3の西側の床面から出土している。Q1の敲石は，炉の覆土中から出土している。TP2の広口壺口縁部片は北西壁付近の覆土上層から，TP6の胴部片は北壁際の覆土上層から，TP9の底部片は北部の覆土中層から，TP7の胴部片は炉の南側の床面から，TP12の底部片は炉の北西部の覆土下層から，いずれも出土している。須恵器片は，攪乱により混入したと思われる。

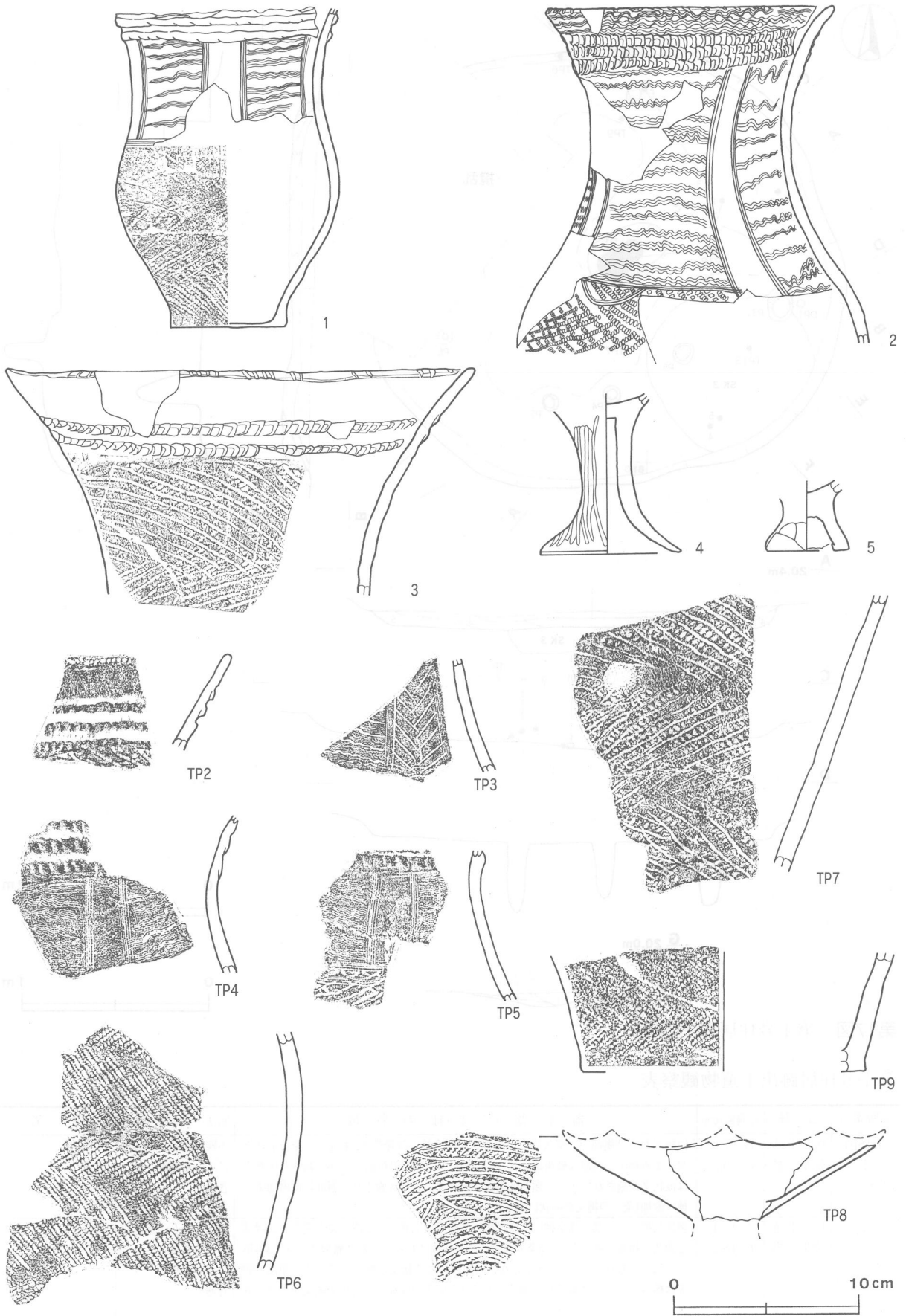
所見 本跡は，出土遺物から後期後半（十王台式期）の住居跡と考えられる。南西側に4本並ぶ柱穴は，この時期の住居跡としては特徴的である。



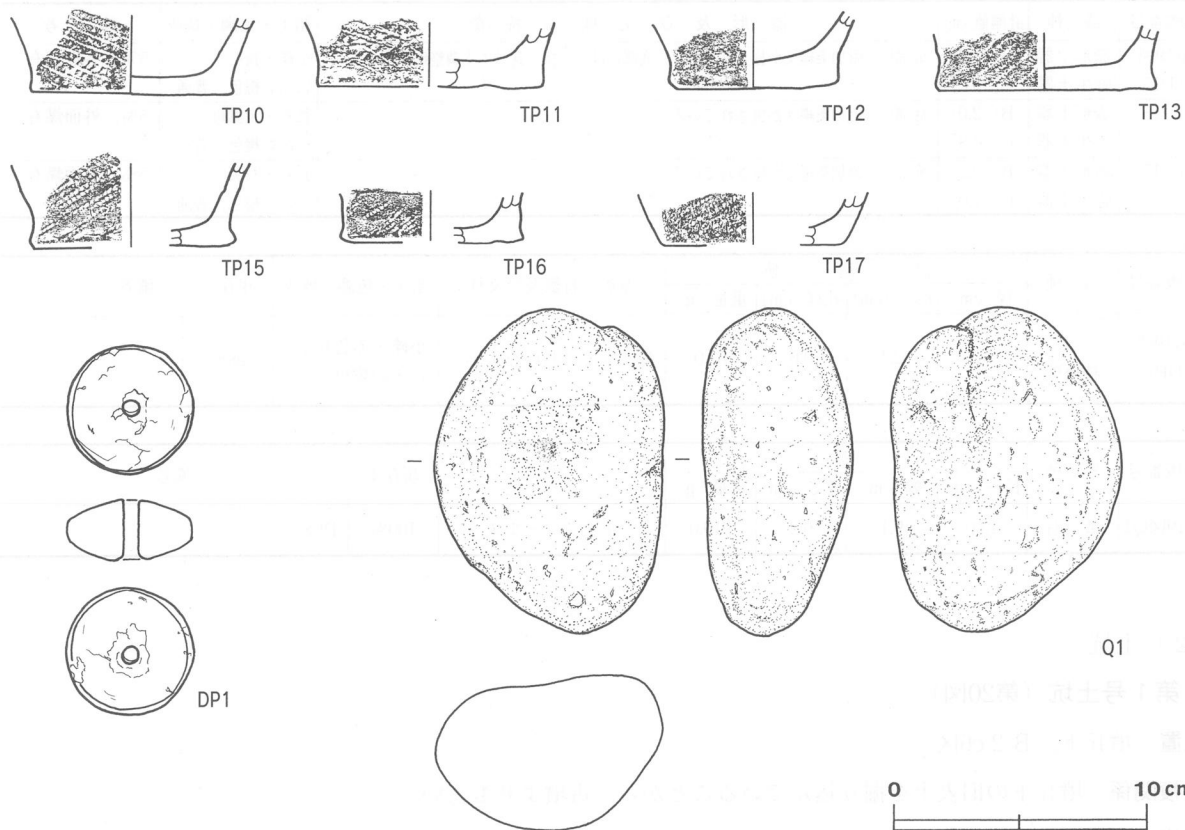
第17図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	広口壺 弥生土器	B(17.2) C 6.2	口縁部および胴部の一部欠損。口縁部と頸部の境には隆帯が2条巡り、隆帯上は指頭による押圧。頸部は櫛歯状工具(4本単位)による縦区画により6分割され区画内には波状文が施されている。頸部と胴部は横走文により区画され、胴部には附加条一種(附加1条)の縄文が羽状に施されている。	小礫・長石・金雲母 にぶい黄橙色 普通	60% PL7
2	広口壺 弥生土器	A 15.4 B(18.2)	胴部欠損。口唇部に縄文押圧。口縁部には櫛歯状工具による波状文が巡る。口縁部と頸部は指頭で押圧された3条の隆帯により区画される。頸部は櫛歯状工具(3本単位)による縦区画により5分割され、区画内には波状文が施されている。頸部と胴部は横走文により区画され、胴部上方には上向きの連孤文、附加条縄文が羽状に施されている。	小礫・長石・赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色 普通	20% PL7
3	広口壺 弥生土器	A[25.2] B(12.3)	口縁部～頸部片。口唇部に縄文押圧。口縁部は無文。口縁部と頸部は指頭で押圧された2条の隆帯により区画される。頸部には附加条二種(附加1条)の縄文が羽状に施されている。	小礫・長石・赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色、普通	15% PL7



第18图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 4	高坏 弥生土器	B(8.6) D 7.6	坏部欠損。粘土塊を柱状にした脚部。外面ナデ。	長石・赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	30%
5	高坏 弥生土器	B(3.8) D 4.4	坏部欠損。粘土塊を柱状にした脚部。外面ナデ。	長石・赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	20%
TP2	広口壺 弥生土器	B(5.2)	口縁部片。口唇部に縄文の回転押圧。口縁部は無文。口縁部と頸部の境には2本の隆帯をもち、頸部には附加条縄文が施されている。	長石・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	5%
TP3	広口壺 弥生土器	B(6.2)	頸部片。櫛歯状工具(4本単位)による縦区画が施され、区画内には綾杉文が施されている。	赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	5%
TP4	広口壺 弥生土器	B(8.6)	頸部片。口縁部との境に3本の隆帯。櫛歯状工具(4本単位)による波状文が施されている。	長石・赤色粒子 にぶい褐色, 普通	5%, 外面煤有。
TP5	広口壺 弥生土器	B(8.2)	頸部片。口縁部との境に隆帯。櫛歯状工具(4本単位)による波状文が施されている。下端には横走文と上向き連弧文が施されている。	長石・赤色粒子 にぶい赤褐色, 普通	5%, 外面煤有。
TP6	広口壺 弥生土器	B(12.9)	胴部片。附加条縄文が羽状に施されている。	長石・赤色粒子 にぶい褐色, 普通	5%
TP7	広口壺 弥生土器	B(14.9)	大形壺型土器の胴部片。附加条縄文が羽状に施されている。	長石・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	5%
TP8	高坏 弥生土器	A[18.2] B(4.0)	坏部片。波状口縁を呈する。磨消縄文による三角連繫文により被飾され、2本の沈線間に半截竹管による刺突がなされている。	石英・赤色粒子 にぶい黄橙色, 普通	5% PL8
TP9	壺形土器 弥生土器	B(6.4)	大形壺形土器の胴部片。底部欠損。附加条縄文が羽状に施されている。	長石・石英 にぶい黄橙色, 普通	5%
第19図 TP10	壺形土器 弥生土器	B(2.9) C[8.0]	底部片。附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部にはヘラ状工具による調整痕。	小礫・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	5%
TP11	壺形土器 弥生土器	B(2.6) C[8.8]	底部片。附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	小礫・赤色粒子 にぶい橙色, 普通	5%
TP12	壺形土器 弥生土器	B(3.0) C 6.6	底部片。摩滅のため施文は不明。	赤色粒子・金雲母 にぶい黄橙色, 普通	5%
TP13	壺形土器 弥生土器	B(2.6) C[8.4]	底部片。附加条縄文が施されている。底部にはヘラ状工具による調整痕。	小礫・金雲母 にぶい橙色, 普通	5%, 外面煤有。

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 TP15	壺形土器 弥生土器	B(3.3) C[7.8]	底部片。附加条縄文が施されている。底部にはヘラ状工具による調整痕。	小礫・長石 にぶい橙色, 普通	5%, 外面煤有。
TP16	壺形土器 弥生土器	B(2.0) C[6.8]	底部片。附加条縄文が施されている。	長石・金雲母 にぶい橙色, 普通	5%, 外面煤有。
TP17	壺形土器 弥生土器	B(2.1) C[7.0]	底部片。附加条縄文が施されている。	長石・石英 にぶい橙色, 普通	5%, 外面煤有。

図版番号	器種	計測値				器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	現存率	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第19図 DP1	土製 紡錘車	5.0	2.4	0.6	57.0	無文。ていねいなナデ。	小礫・赤色粒子 にぶい橙色	98%	

図版番号	器種	計測値				石質	現存率	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第19図Q1	敲石	13.0	9.1	6.2	919.0	ホルンフェルス	100%	PL8

(2) 土坑

第1号土坑 (第20図)

位置 墳丘下, B 2 c6区。

重複関係 墳丘下の旧表土を掘り込んでいることから, 古墳よりも古い。

規模と平面形 確認できたのは, 長径75cm, 短径68cmの楕円形で, 深さは25cmである。

主軸方向 N—68°—W

壁面 緩やかに立ち上がる。

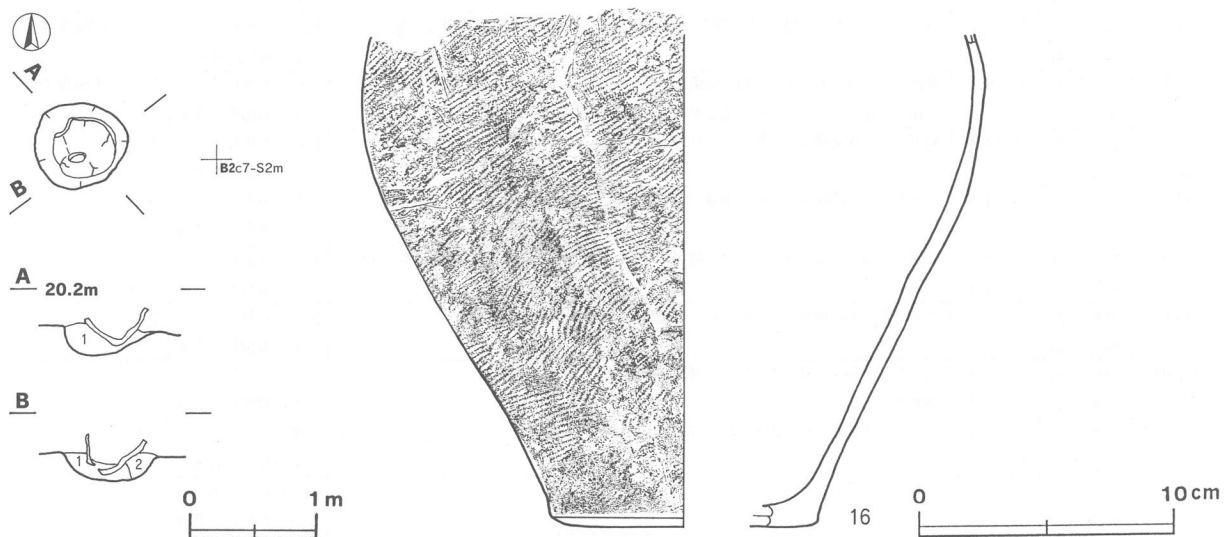
底面 皿状である。締めりは見られない。

覆土 2層からなる。覆土が薄く, 堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 16の壺形土器が, 斜位で出土している。壺の底部中央は, 欠損している。



第20図 第1号土坑・出土遺物実測図

所見 本跡は、出土土器から弥生時代後期前半の土坑と考えられる。出土状況や土器底部の欠損状況から、土器棺墓の可能性を含めて調査したが、土器上部が欠損し大きさや器形が十分に把握できないこと、外面に煤が多量に付着し、煮炊きに使用されたと考えられる土器であることから、性格については不明である。

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 16	壺形土器 弥生土器	B(19.5) C 10.7	口縁部から胴部の一部欠損。底部中央部は欠損。胴部上端にわずかに曲線を示す沈線がみられる。	砂粒・長石・石英 淡黄色、普通	30%、外面煤有。内・外面剝離顕著。 PL7

3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、平安時代の竪穴住居跡3軒が確認された。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

第2号住居跡（第21図）

位置 調査区の中央部，B 2 d2区。

規模と平面形 長軸3.18m，短軸3.04mの方形である。

主軸方向 N—88°—E

壁 壁高は16～22cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。中央部は硬く踏みしめられたロームが，ブロック状に散在する。掘り方は全体に凹凸が著しい。北西コーナーは，直径1m，深さが15cmほどの円形に掘り下げられている。貼り床は，ロームブロックと黒色土によって構築されている。

竈 北壁中央部を20cmほど掘り込み，構築されている。袖の部分には，硬化したロームとわずかな白色粘土が確認され，床面上に構築されている。火床面は床面よりもやや低くなっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量，焼土中ブロック・炭化粒子微量

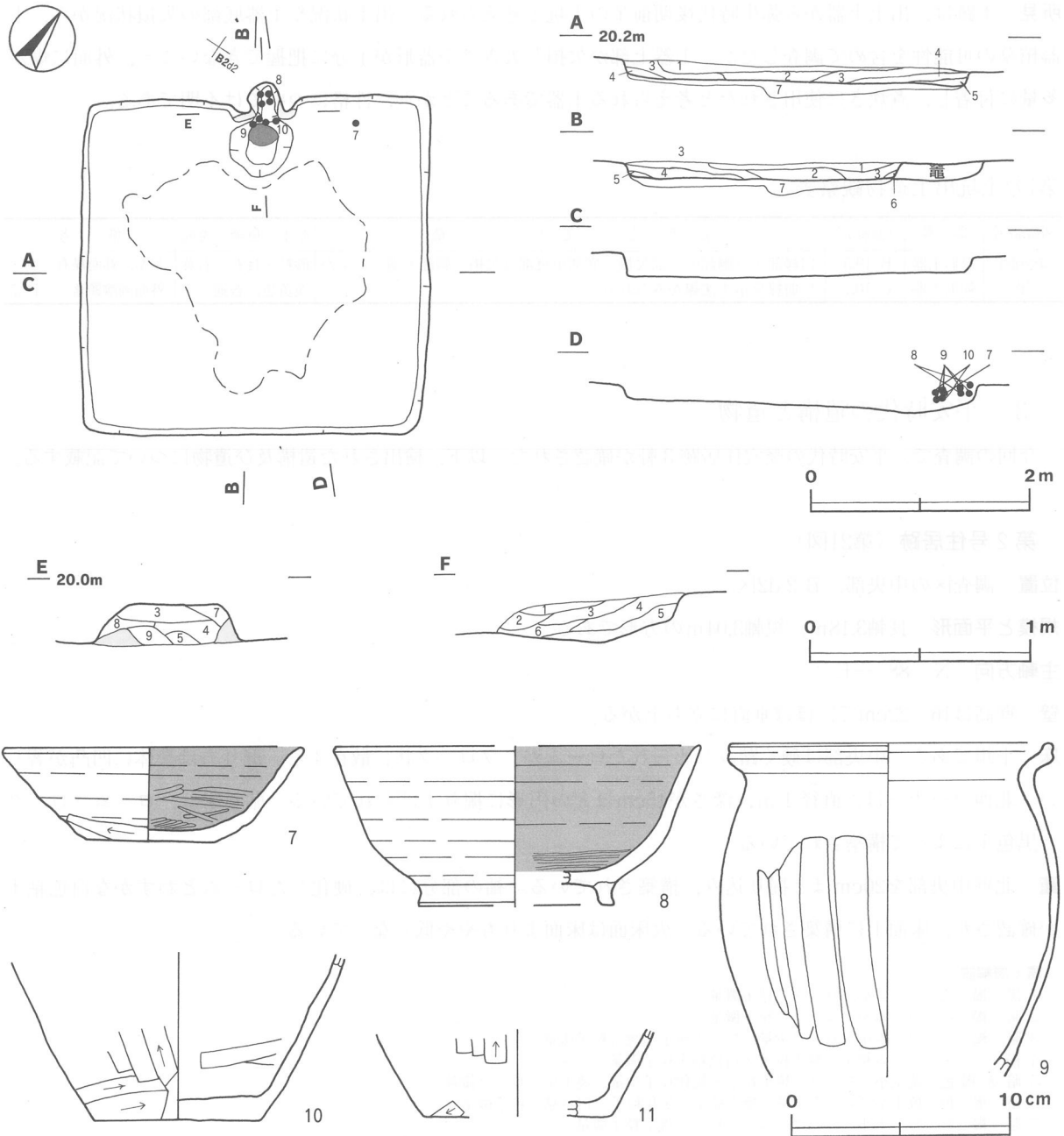
覆土 6層からなる。レンズ状の堆積をしていることから，自然堆積と考えられる。なお，土層断面図中，第7層は，貼り床部の層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物 土師器片68点，須恵器片2点及び混入した弥生土器片81点が出土している。7の土師器坏は竈東部から逆位で，8の土師器高台付坏，9・10の土師器甕は竈内のいずれも覆土中層から出土している。11の土師器甕は，覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 柱穴は，床面及び掘り方を精査したが確認されなかった。時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第21図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 7	坏 土師器	A 13.6 B 4.5 C 5.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	小礫・長石・石英 灰褐色、普通	50% PL7
8	高台付坏 土師器	A[12.6] B 7.2 D[9.0] E 1.0	体部・口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ロクロナデ後、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	長石・石英・赤色粒子 にぶい黄橙色、普通	25% PL7
9	甕 土師器	A 14.6 B(15.2)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。	小礫・長石・石英・赤色粒子、橙色、普通	20% PL7
10	甕 土師器	B(7.6) C 7.6	体部・口縁部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面横ナデ、外面ヘラ削り。	小礫・長石・石英・赤色粒子、橙色、普通	10%、外面煤有。
11	甕 土師器	B(4.0) C[8.4]	体部・口縁部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面横ナデ、外面ヘラ削り。	小礫・長石・石英、 にぶい橙色、普通	5%

第3号住居跡 (第22・23図)

位置 調査区の北部, A 2 i5区。

重複関係 本跡は, 古墳の周溝の覆土を掘り込んで構築されていることから, 古墳よりも本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸2.80m, 短軸2.56mの長方形である。

主軸方向 N-71°-E

壁 壁高は50cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ローム質で, 全体に平坦である。竈の周辺は, わずかに硬化したロームがブロック状に散在している。掘り方は, わずかで床面下1~3cmほどである。貼り床は, ほとんど見られない。

竈 南東コーナーの壁を30cmほど掘り込んで構築されている。両袖とも確認されなかった。わずかに硬化したロームと白色粘土粒子が南東コーナー部の床面に散在しており, 竈材の一部と考えられる。火床面は長径20cm, 短径15cmの楕円形で, 土製の支脚が据えられた状態で出土している。

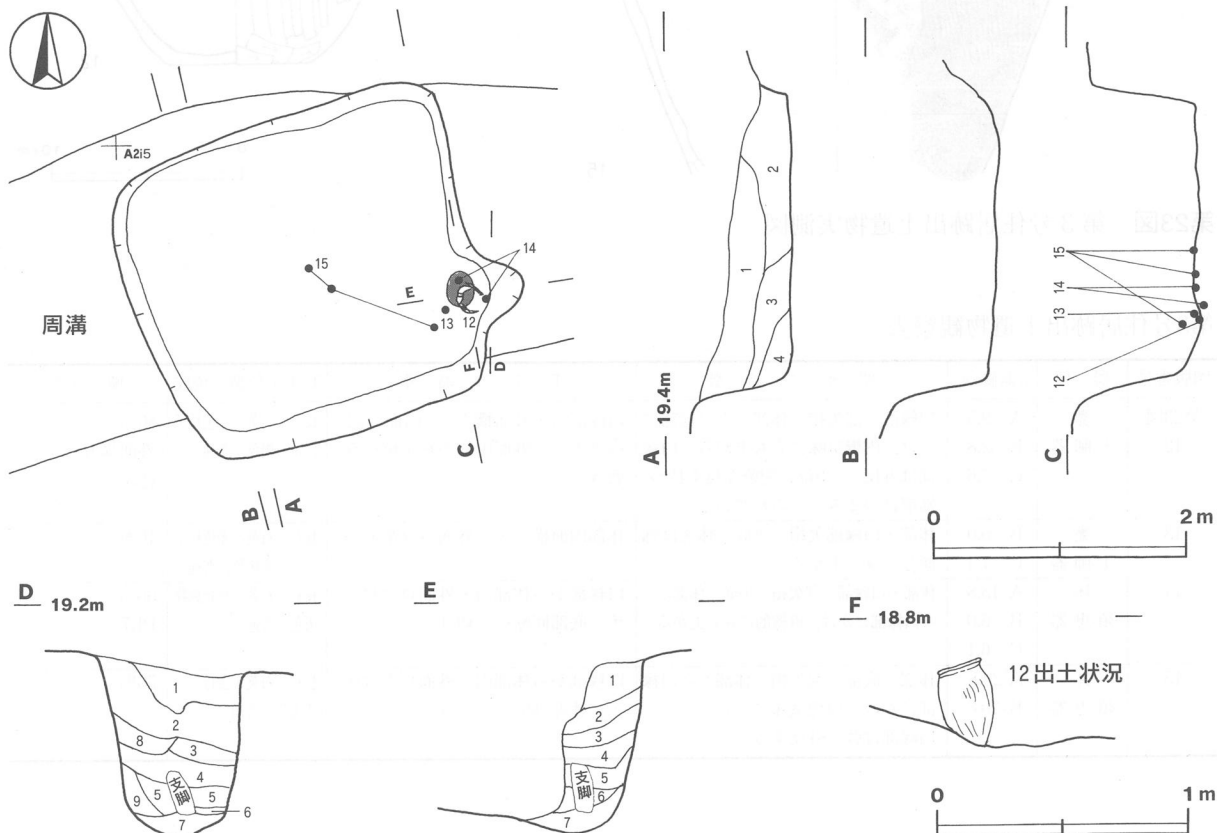
竈土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 6 褐色 焼土小ブロック・炭化物少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 褐色 焼土小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗 褐色 ローム粒子微量
- 9 暗 褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・粒子微量

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積をしていることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

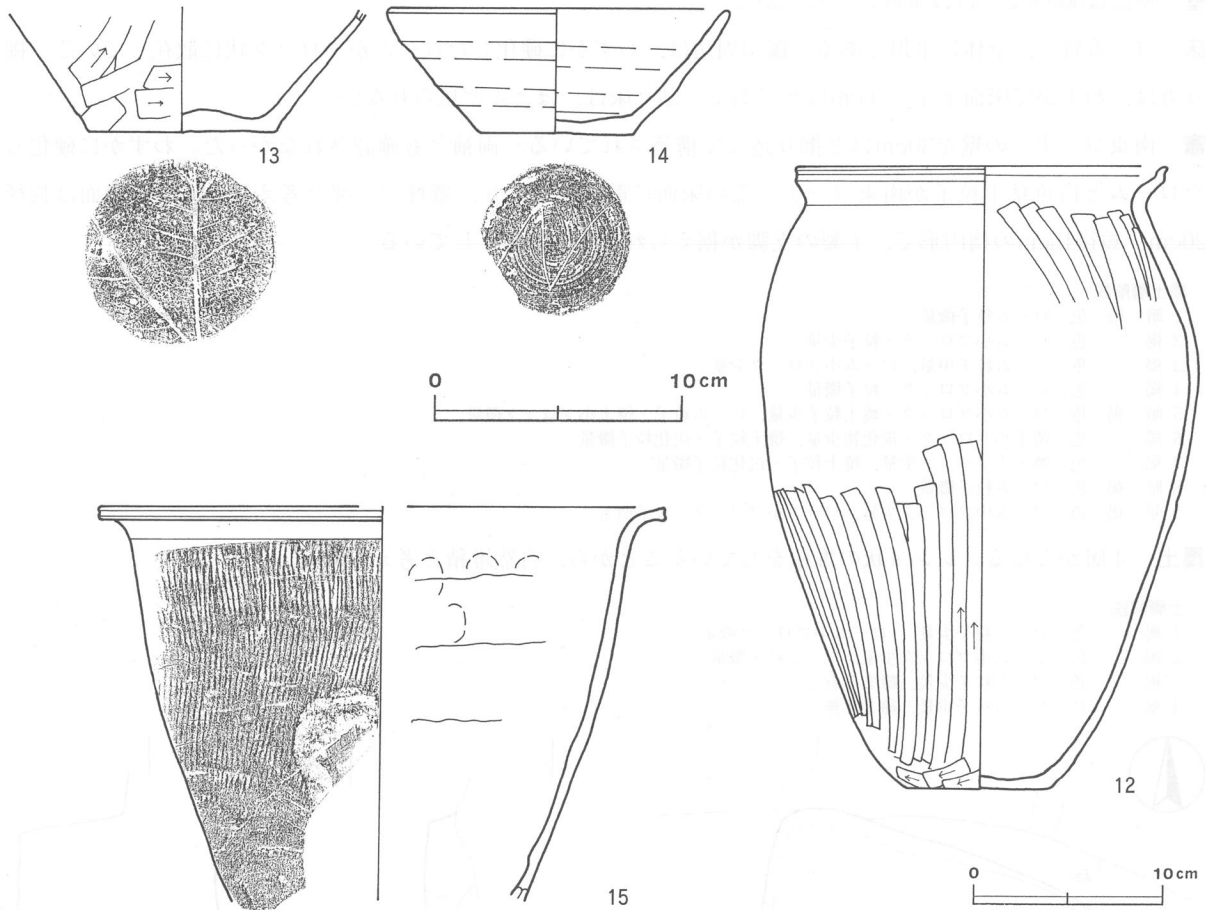
- 1 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 締まり有
- 4 褐色 ローム粒子少量, 締まり無



第22図 第3号住居跡実測図

遺物 土師器片56点, 須恵器片13点, 土製品(支脚)1点, 及び混入した弥生土器片8点が出土している。12・13の土師器甕, 14の須恵器坏は, いずれも竈付近の床面から出土している。15の須恵器鉢は, 床面及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 柱穴は, 床面及び掘り方を精査したが, 確認されなかった。時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第23図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 12	甕 土師器	A 19.3 B 32.8 C 7.6	口縁部一部欠損。体部から口縁部にかけて, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し, 中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ, 内面一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ磨き。	長石・石英・赤色粒子にふい褐色, 普通	80% 外面煤有。 PL7
13	甕 土師器	B (5.0) C 7.4	体部・口縁部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面横ナデ。外面ヘラ削り。	長石・石英・赤色粒子にふい赤褐色, 普通	10%
14	坏 須恵器	A 13.8 B 5.0 C 6.1	体部・口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に立ち上がる。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	長石・石英・針状鉱物灰色, 普通	55% PL7
15	鉢 須恵器	A[29.8] B(20.8)	体部・底部一部欠損。体部から口縁部にかけて, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。	長石・石英・雲母黄灰色, 普通	30%

第4号住居跡 (第24図)

位置 調査区の北部, A 2 i7区。

規模と平面形 長軸2.70m, 短軸2.36mの長方形である。

主軸方向 N-68°-W

壁 外傾して立ち上がり, 壁高は80cmである。

床 ローム質で硬化面はなく, 平坦である。

竈 南コーナー部の壁を30cmほど掘り込んで構築されている。両袖とも確認されなかった。わずかに硬化したロームと白色粘土粒子が南東壁下部, 南西壁下部に散在しており, 竈材の一部と考えられる。火床面は直径13cmほどの円形で, わずかに火熱を受けた程度である。

竈土層解説

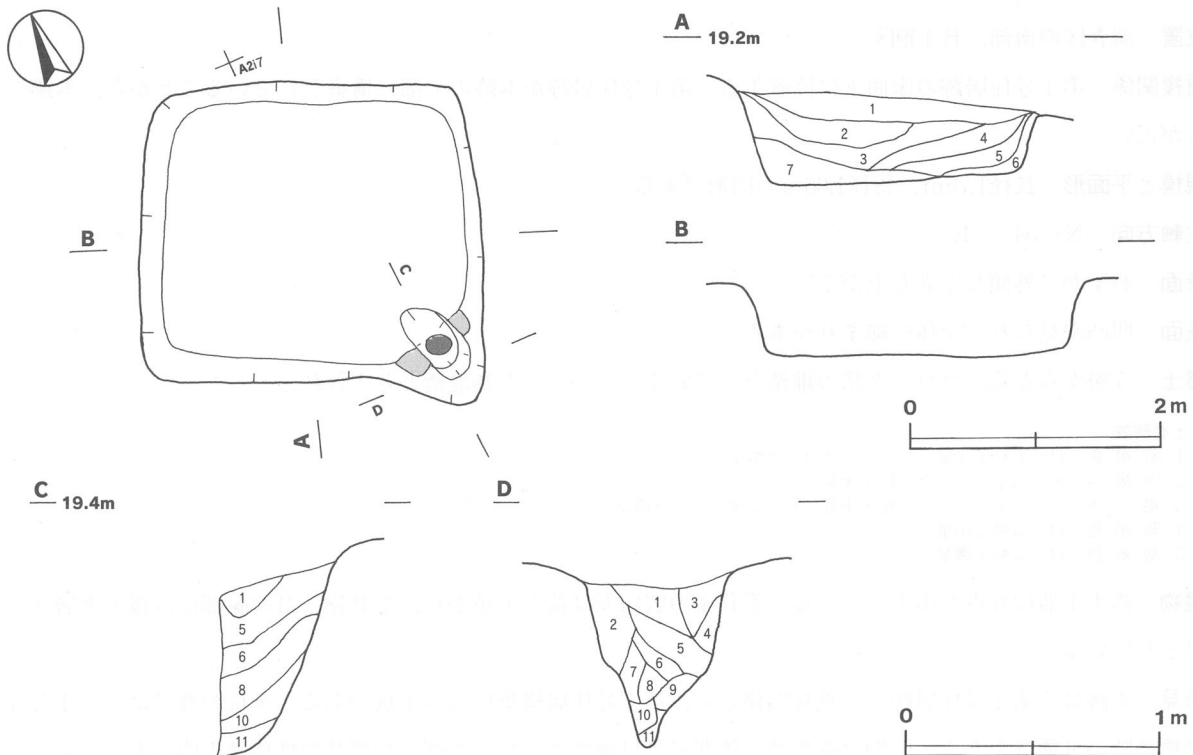
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・粘土粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 7 灰褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子多量, 炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・粒子少量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

覆土 7層からなる。レンズ状の堆積をしていることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 明褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, ローム中ブロック微量
- 6 明褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量

所見 本跡にともなう内部施設としては, 竈が確認されたのみである。遺物は出土していない。時期は, 住居の形状が第3号住居跡に類似していることから, 9世紀前後の住居跡と考えられる。



第24図 第4号住居跡実測図

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期不明の土坑2基が確認された。以下、検出された遺構及び遺物について掲載する。

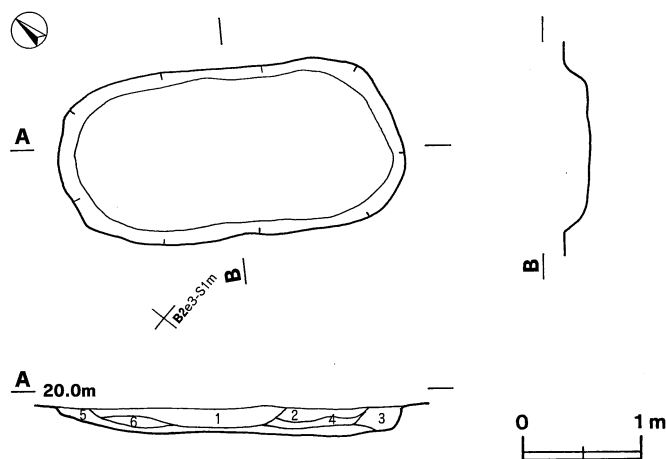
第2号土坑 (第25図)

位置 調査区の中央部, B 2 e3区。

規模と平面形 長径2.84m, 短径1.38mの楕円形である。

主軸方向 N-38°-W

壁面 わずかに外傾して立ち上がる。



底面 ローム質で平坦である。全体に締まりがある。

覆土 6層からなる。ブロック状の堆積をしていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, ローム中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量

所見 本跡から遺物は出土していない。重複関係もなく、時期及び性格については不明である。

第25図 第2号土坑実測図

第3号土坑 (第26図)

位置 調査区の南部, B 1 i9区。

重複関係 第1号住居跡の床面下に位置する。第1号住居跡が本跡の上部に構築されていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長径1.76m, 短径1.66mの円形である。

主軸方向 N-54°-E

壁面 わずかに外傾して立ち上がる。

底面 凹凸が見られ、全体に締まりがある。

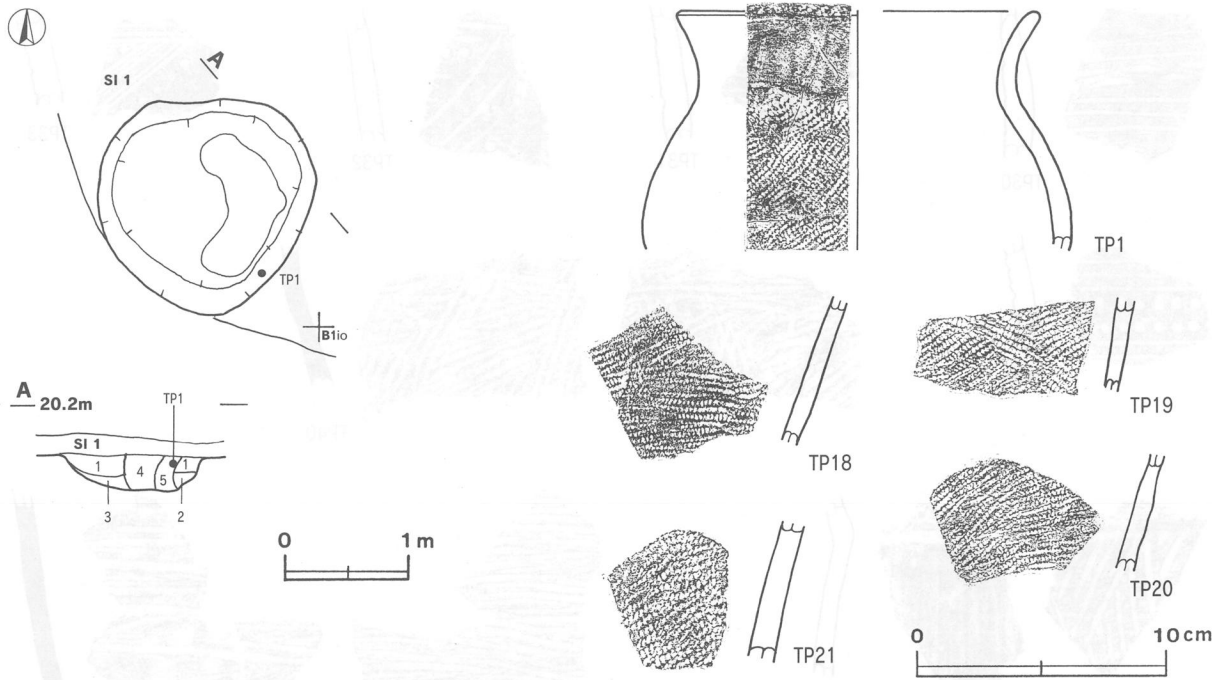
覆土 5層からなる。ブロック状の堆積をしていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 明褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 弥生土器片6点が出土している。TP1の広口壺は覆土上層から、TP18~21の胴部片は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、第1号住居跡との重複関係から、第1号住居構築以前の土坑である。土坑の埋没は、第1号住居構築時の可能性もある。時期は弥生時代後期後半以前であるが、詳細な時期及び性格は不明である。



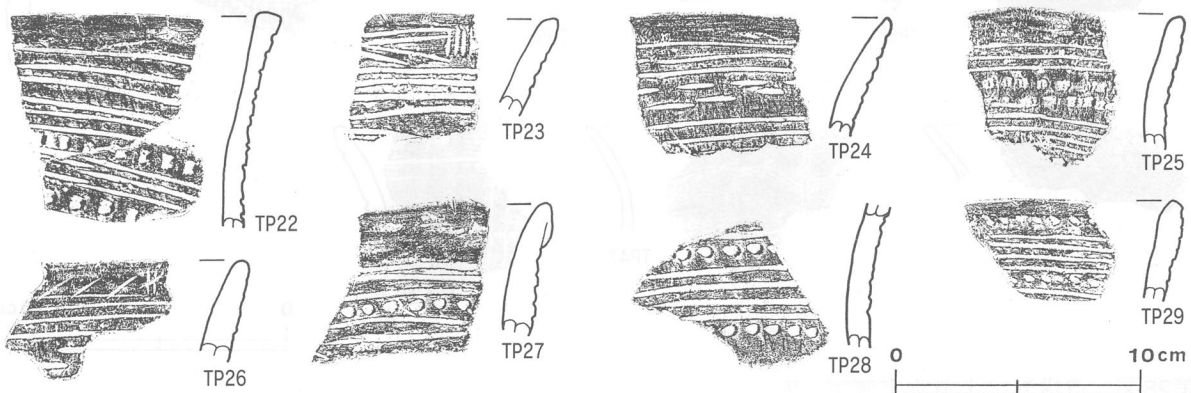
第26図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表

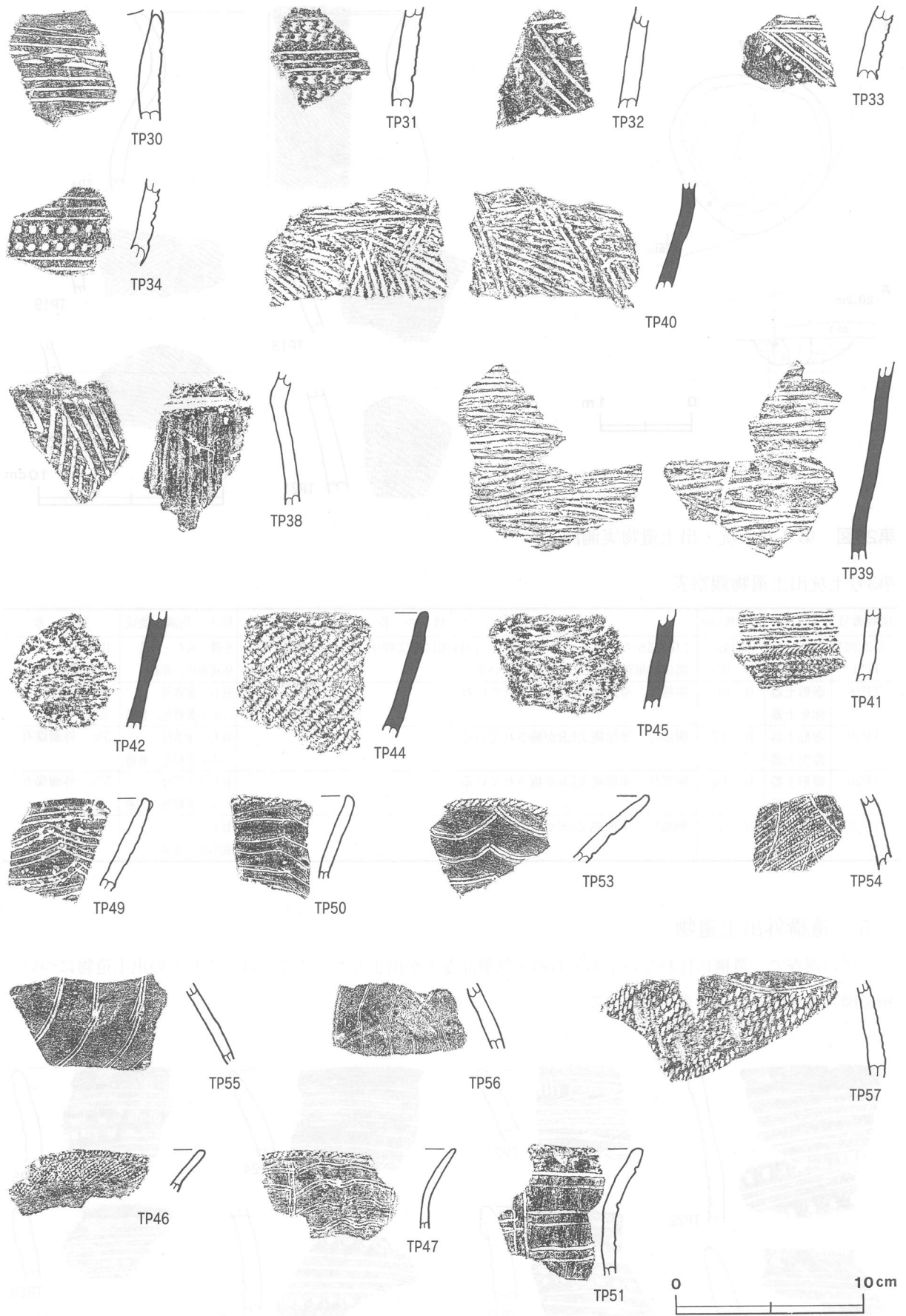
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 TP1	広口壺 弥生土器	A[14.0] B(9.5)	口縁部から胴部にかけての破片。口唇部に縄文押圧。口縁部無文、胴部には単節縄文LRが施されている。	小礫・長石・石英 灰黄褐色、普通	10% 外面煤有。
TP18	壺形土器 弥生土器	B(6.0)	胴部片。単節縄文LRが施されている。	長石・金雲母 にぶい黄橙色、普通	5% TP19・20 と同一個体。
TP19	壺形土器 弥生土器	B(3.7)	胴部片。単節縄文LRが施されている。	長石・金雲母 にぶい黄橙色、普通	5% 外面煤有。
TP20	壺形土器 弥生土器	B(4.6)	胴部片。単節縄文LRが施されている。	長石・金雲母 にぶい黄橙色、普通	5% 外面煤有。
TP21	壺形土器 弥生土器	B(5.7)	胴部片。単節縄文LRが施されている。	長石 褐灰色、普通	5%

5 遺構外出土遺物

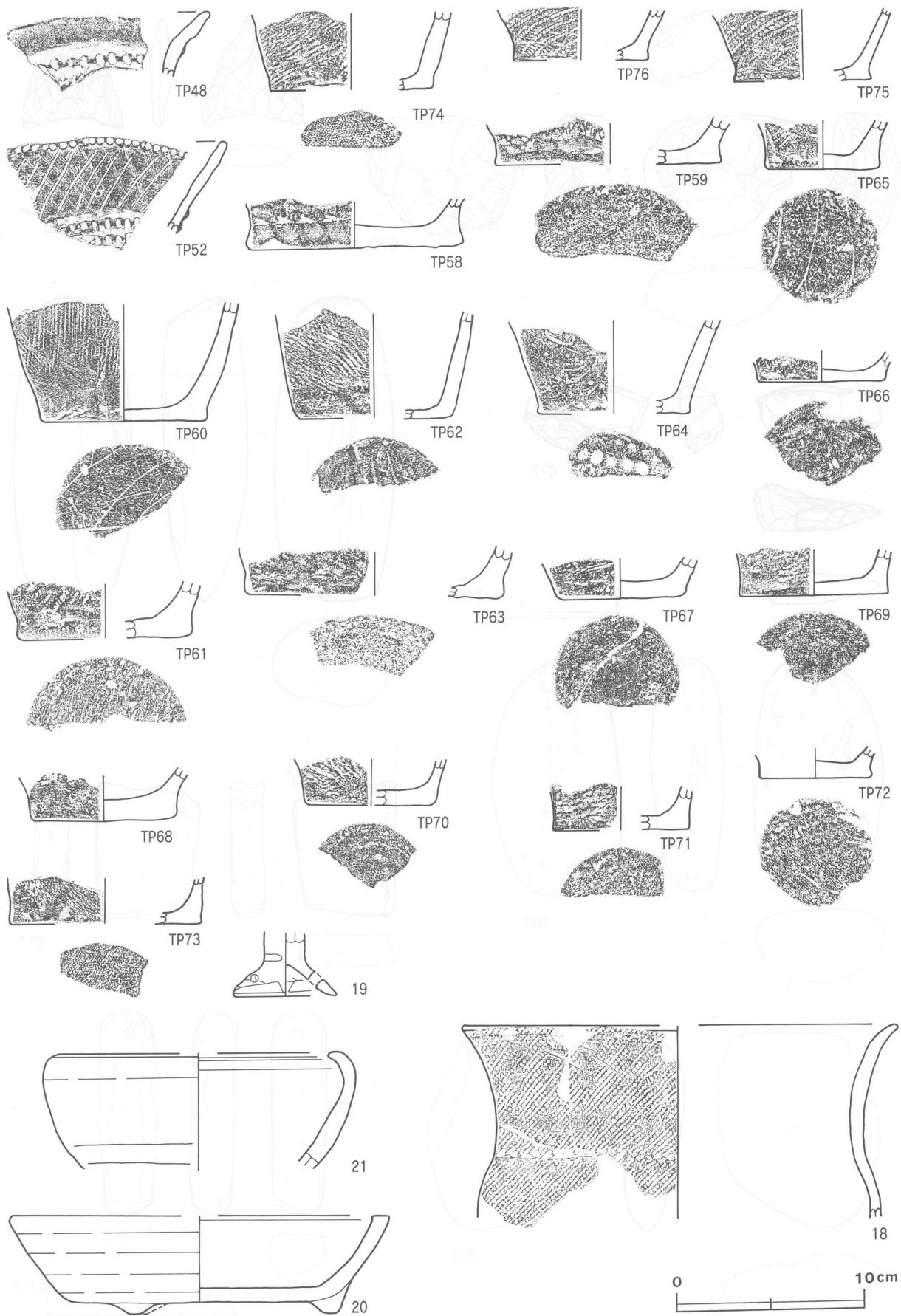
今回の調査で、遺構に伴わない土器・石器・鉄製品などが出土した。ここでは、これらの出土遺物について拓影図・実測図及び観察表を掲載する。



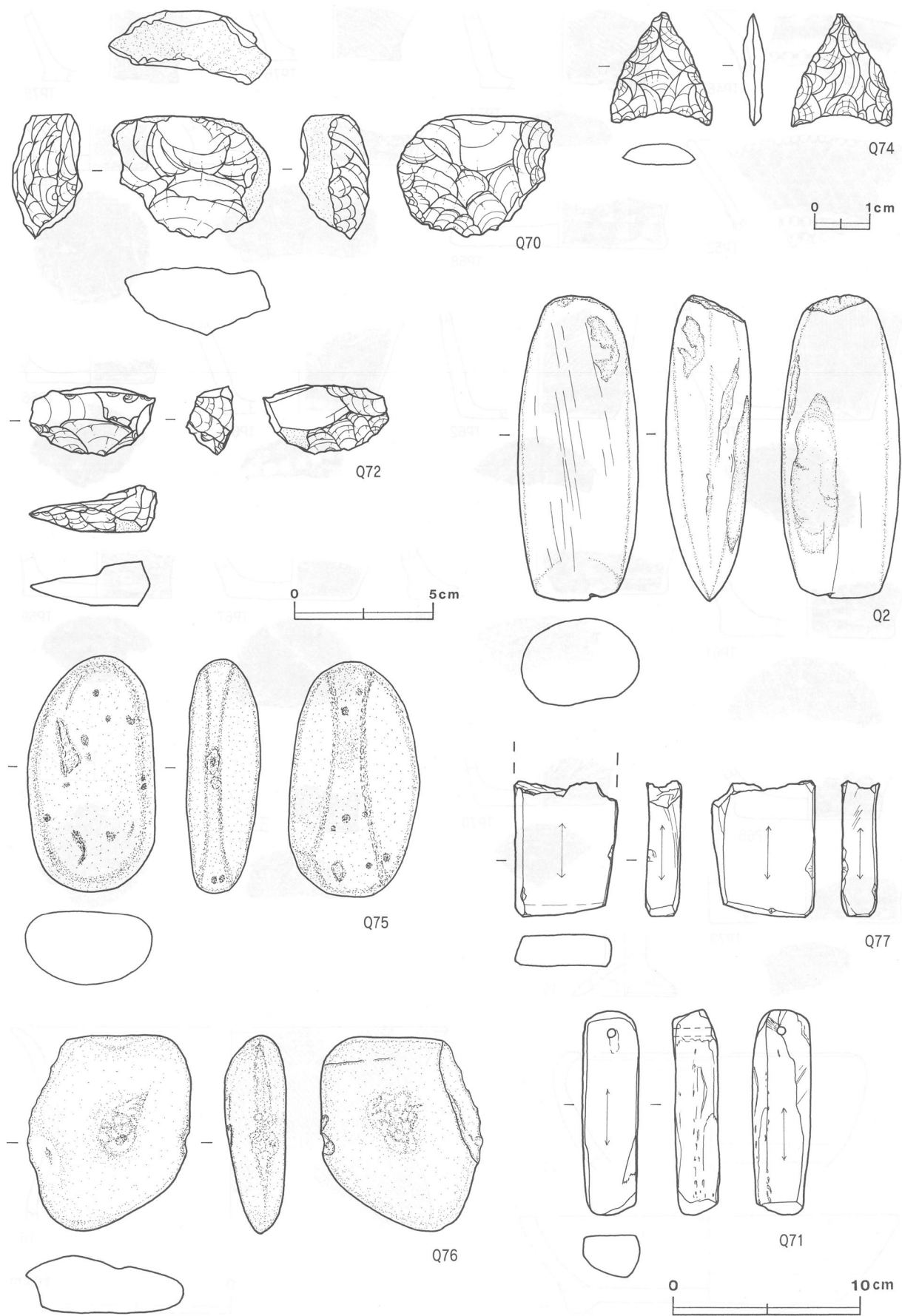
第27図 遺構外出土遺物実測図 (1)



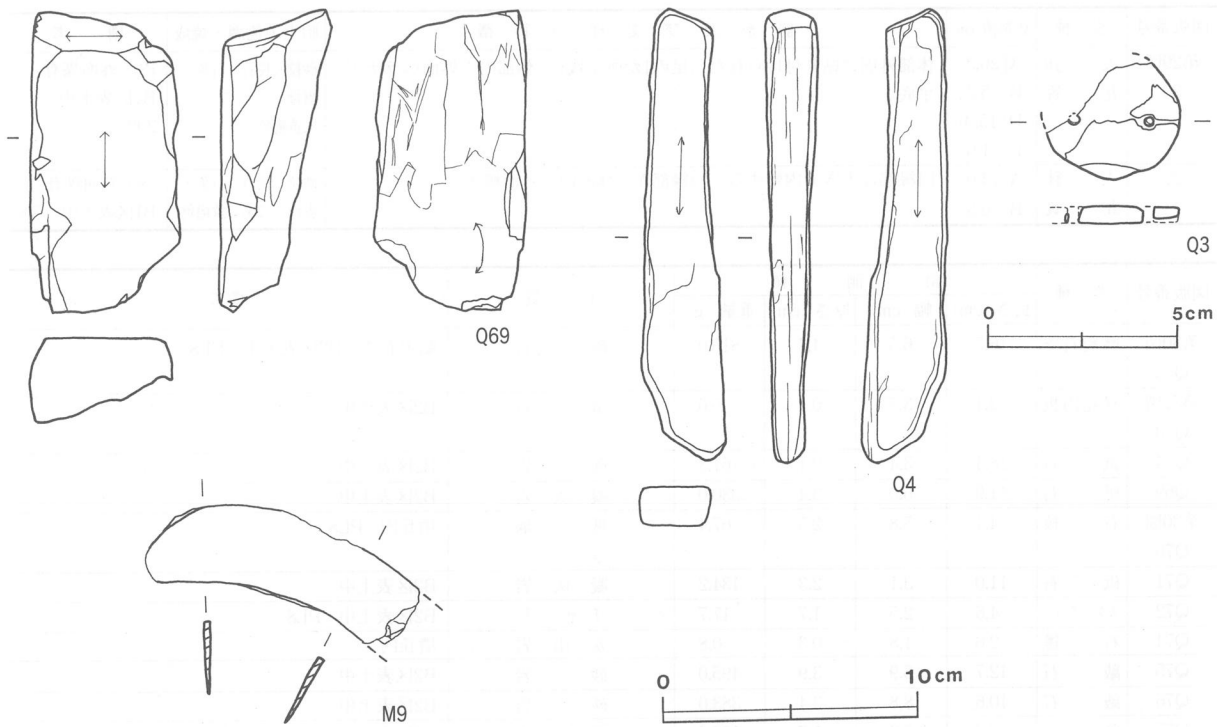
第28図 遺構外出土遺物実測図 (2)



第29図 遺構外出土遺物実測図 (3)



第30図 遺構外出土遺物実測図 (4)



第31図 遺構外出土遺物実測図 (5)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	時期	形式	器形及び文様の特徴	備考
第27・28図 TP22~34	縄文時代 早期中葉	田戸下層式	TP22~27, 29・30は口縁部片, TP28・31~34は胴部片である。TP22の形状は緩やかに外反している。いずれも沈線文または棒状工具による刺突文が施されている。	墳丘内 PL8
第28図 TP38~40	早期後葉	茅山下層式	TP39は頸部片, TP40は胴部片である。いずれも内・外面に貝殻条痕文が施されている。胎土に繊維を含む。	墳丘内
第28図TP42・ 44・45	前期前葉	不明	TP44は口縁部片, TP42・45は胴部片である。胎土に繊維を含む。	B2区表土中
第28図TP41	前期後葉	興津式	胴部上位の破片である。竹管による平行沈線と連続刺突文が施されている。	B2区表土中
第28図 TP49・50・ 53~57	弥生時代 中期後葉	足洗式	TP55~57はいずれも壺形土器の胴部から頸部にかけての破片で、2本の沈線による渦巻き文が施されている。TP54・57は地文に単節縄文が施されている。TP49・50は細頸の壺形土器の口縁部片, TP53は高坏の口縁でいずれも2本の平行沈線により連弧文が施されている。	墳丘内 PL8 表土中
第28図 TP46・47~ 51	後期前葉~中葉	不明	TP46・47・51は壺形土器の口縁部片である。いずれも2本単位の沈線により、波状文または連弧文が施されている。TP47には縦区画がなされている。TP46は口縁部に単節縄文LRが施され頸部は無文, TP51は口縁から頸部にかけて2本単位の横走文・縦走文が施されている。	B2区 表土中 PL8
第29図 TP48・52・ 74~76	後期後葉	十王台式	TP48・52は壺形土器の口縁部片で、キザミのある隆帯が貼られている。TP74~76は壺形土器の底部から胴部下位にかけての破片で、胴部外面には附加条1種(附加1条)の縄文が施文され、底部には木葉痕が認められる。	B2区 表土中
第29図 TP58~73	後期	不明	TP58~73はいずれも底部から胴部下位にかけての破片である。TP60・62・73には燃糸文が施されている, TP60・65の底部には木葉痕が, TP59・64・69・71~73の底部には布目痕が認められる。	墳丘内, B2区 表土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 18	広口壺 弥生土器	A[23.0] B(10.4)	口縁部片。口唇部に縄文回転押圧。口縁部以下は附加条縄文が施されている。	小礫・長石・石英・ 金雲母, にぶい橙色, 普通	B2区 表土中 5%
19	高坏 弥生土器	B(3.4) D 5.4	坏部欠損。粘土塊を広げて作られた脚部。穿孔2か所。内・外面ともにていねいなナデ。	小礫・金雲母 にぶい橙色, 普通	B2区 表土中 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 20	火鉢 瓦質	A[20.3] B 5.2 D[15.0] E 1.6	体部外周に貼り付けられた三足の1か所が残存。体部内・外面へラナデ。平底。	砂粒・長石・石英・雲母 灰黄褐色	内・外面煤有。 B1区表土中 20%
21	火鉢 瓦質	A 14.0 B (6.3)	口縁部は大きく内彎する。口縁部から体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母, にぶい黄褐色	内・外面煤有。 B1区表土中 5%

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第30図 Q 2	磨製石斧	16.5	6.5	4.7	815.0	砂岩	蛤刃石斧, B2区表土中 PL8
第31図 Q 3	双孔円板	(3.1)	(3.5)	0.4	(5.6)	滑石	B2区表土中
Q 4	砥石	18.4	3.4	2.1	161.3	砂岩	B2区表土中
Q69	砥石	11.9	6.0	3.4	330.0	凝灰岩	B2区表土中
第30図 Q70	石核	4.4	5.8	2.5	67.4	瑪瑙	墳丘内 PL8
Q71	砥石	11.0	3.1	2.3	134.2	凝灰岩	B2区表土中
Q72	スクレイパー	4.6	2.5	1.7	17.7	チャート	B2区表土中 PL8
Q74	石鏃	2.0	1.8	0.3	0.8	安山岩	墳丘内
Q75	敲石	12.7	6.9	3.9	495.0	砂岩	B2区表土中
Q76	敲石	10.6	8.8	3.4	383.0	砂岩	B2区表土中
Q77	砥石	(7.3)	5.6	1.7	(139.6)	凝灰岩	B2区表土中

図版番号	器種	計測値 (cm・g)				備考
		全長	最大幅	厚さ	重量	
第31図M9	鉄鏃	(10.9)	4.0	0.25	(26.0)	南部周溝外, 表面採集, PL8

表2 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古~新)
							壁溝	支柱穴	出入口	炉・竈	貯蔵穴			
1	B1h0	N-50°-W	隅丸長方形	5.10×4.60	15~25	凹凸	-	5	1	炉	-	自然	弥生土器(広口壺)、土製品(鐘鐺車)、石器(敲石)	SK3→本跡
2	B2d2	N-88°-W	方形	3.18×3.04	16~22	平坦	-	-	-	竈	-	自然	土師器(坏・高台付坏・甕)、須恵器片	
3	A2i5	N-71°-W	長方形	2.80×2.56	50	平坦	-	-	-	竈	-	自然	土師器(甕)、須恵器(坏・甗)	TM1→本跡
4	A2i7	N-68°-W	長方形	2.70×2.36	80	平坦	-	-	-	竈	-	自然		TM1→本跡

表3 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (主軸方向)	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古~新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	B2c6	N-68°-W	楕円形	(0.75)×(0.68)		緩斜	皿状	不明	弥生土器(壺)	本跡→TM1
2	B2e3	N-38°-W	隅丸長方形	2.84 × 1.38		外傾	平坦	人為		
3	B1h9	-	円形	1.76 × 1.66		外傾	凹凸	人為	弥生土器片	本跡→S11

第4節 ま と め

今回の調査によって、古墳1基、竪穴住居跡4軒、土坑4基を確認した。ここでは、時期ごとに各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

1 愛宕山古墳

現況を含め、調査により明らかになった事柄とそこから推測されることについて整理すると、次のようになる。

(1) 立地

当古墳は、北に久慈川を望む那珂台地北端の舌状台地の縁辺部に立地する。台地の標高は約20mで、低地との比高は約18mである。舌状台地は、墳丘を築造するにも、墳丘の存在を示すにも好条件の地形であると考えられる。調査時においては当古墳（地元では龍神山と呼ばれていた）だけが現存していた。しかし、当遺跡の南に接する畑地には以前、古墳が存在したこと、さらに曾我神社参道脇に石棺の蓋石と思われる石材が存在することなどから、当古墳周辺には数基の古墳が存在していたと考えられる。

(2) 古墳の形状及び埋葬形態

当古墳の規模は、径約25m、高さ2.5mほどの円墳である。木棺直葬（第1主体部）と粘土床（第2主体部）の2基の埋葬施設を有している。第1主体部が墳丘中央部に位置し、第2主体部がその南に位置していることから、第1主体部が墳丘築造時、第2主体部がその後の埋葬時のものである。ただ、2基の施設の埋葬時期は、互いの位置関係からそれほど時間差が無いものと考えられる。これらの埋葬形態は一般的に横穴式石室以前のものである。当地域において横穴式石室が一般化するの6世紀に入ってからと考えられている。

(3) 遺物

第1主体部からは、鉄剣1口、白玉10点が、第2主体部からは、鉄鏃5本、白玉53点、直刀片1点、刀子片2点が出土した。いずれの遺物も、出土状況から被葬者に対する副葬品と考えられる。このうち第2主体部の攪乱層から出土した直刀片についても、副葬品の可能性が高い。

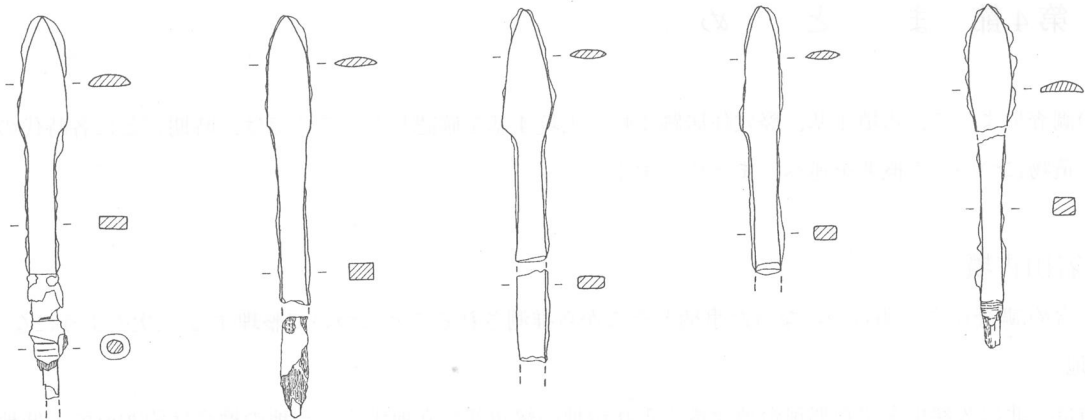
また、周溝の覆土上層から土師器埴が出土している。調査区及び南部に接する中坪遺跡からは、古墳時代の土師器等の遺物は採集されていないことから、付近に該期の集落はないと考えられる。したがって、埴は古墳と何らかの関連を持つ遺物の可能性が高い。埴は、口縁部が欠損しているために十分な検討はできないが、5世紀後半の様相を示している。

当地域においては、6世紀代の古墳には埴輪が伴う場合が多い。しかし、埴輪は墳丘や周溝で確認されず、調査区域及びその周辺からも出土していない。5世紀中葉に位置付けられている東海村権現山古墳からは、外面に格子目状の叩きを持つ円筒埴輪片が出土している。これらを当地における埴輪導入時の一様相と考えるならば、当古墳は権現山古墳以前の築造となる可能性を持つ。

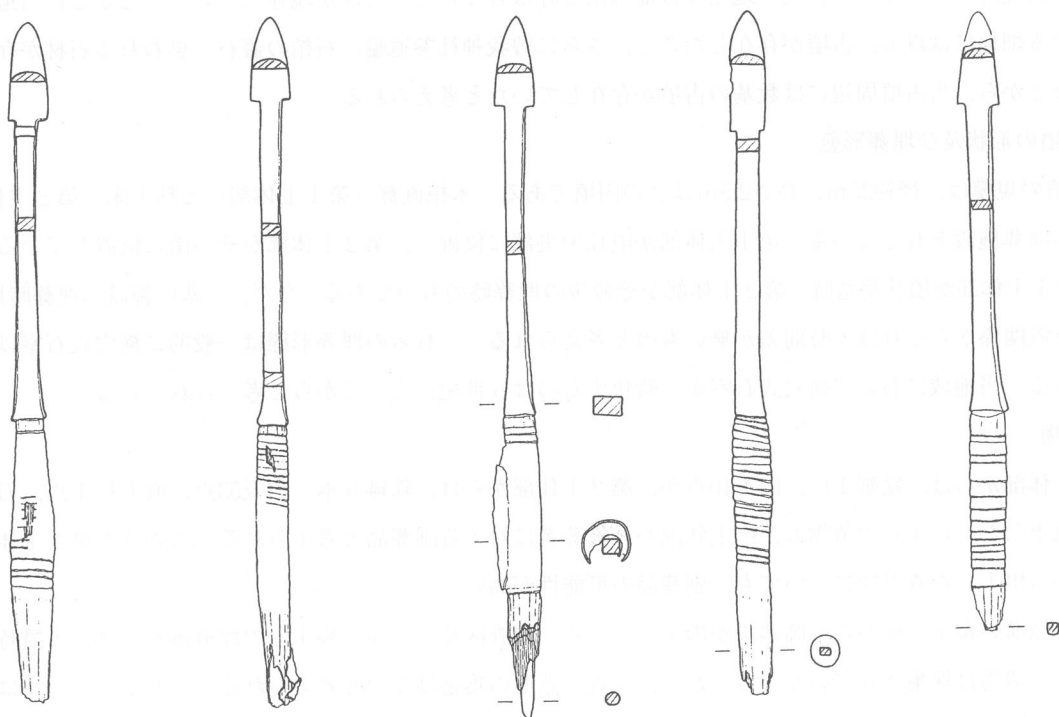
ア 鉄鏃の検討

先に述べた副葬品の中で、明確な形態変化を追えるものは第2主体部から出土した鉄鏃である。周辺において調査された古墳に日立市西大塚古墳群¹⁾がある。1号墳からは馬具や武器（大刀、鉄鏃）が出土している。ここでは、第2主体部から出土した鉄鏃と西大塚1号墳出土の鉄鏃とを対比させながら、第2主体部の埋葬時期についてさらに検討したい（第32図）。鉄鏃の分類基準・方法については、杉山秀宏氏の論²⁾に基く。

第2主体部から出土した5本の鉄鏃と西大塚1号墳から出土した鉄鏃は、いずれも長頸鏃群として捉えることができる。第2主体部から出土した5本の鉄鏃の全長は、10～11cmほどと推定できる（遺物観察表参照）。



愛宕山古墳第2主体部出土鉄鏃



西大塚1号墳出土鉄鏃〔報告書から一部加筆して転載〕

第32図 愛宕山古墳・西大塚1号墳出土遺物実測図

鏃身長と頸部長を比較すると、頸部長は鏃身長を明らかに上回るもののさほど大きな差はない。また、逆刺は認められず斜め関で、鏃身の作りは両丸造りである。これに対し、西大塚1号墳出土の鉄鏃は、頸部長は鏃身長3～4倍あり、鏃身長を大きく上回る。鏃身関部は角関で、鏃身の作りは片丸造りである。以上のように両者は同じ長頸鏃群でありながらも、細部には大きな相違が見られ、この相違はそのまま時間的な形態の変化として捉えることができる。第2主体部から出土した5本の鉄鏃は、長頸鏃の祖形に近い形状と考えられ、杉山氏の「鉄鏃による時期区分」によれば、西大塚1号墳出土の鉄鏃は6世紀前葉、第2主体部から出土した5本の鉄鏃は5世紀中葉に位置づけられることになる。

イ 白玉の検討

当古墳からは、第1・2主体部合わせて63点の滑石質の白玉が出土している。白玉は鉄鏃ほど形態変化が明確に捉えることができない遺物であるが、篠原祐一氏は、祭祀遺物の白玉を中心に取り上げ、製作技法を検討しさらに分類・編年について論じている³⁾。この中で篠原氏は、白玉の各時期ごとの生産の特徴について「製品の質を求められる時期から量を求められる時期への変遷」であると捉え、編年を示している。つまり、製作時の難易度が高い方から低い方へ（算盤玉状から棗玉状、さらに白玉状へ）という変化を時間の軸と捉えている。当古墳出土の白玉は、形状は63点中35点が明確に「側面に膨らみを持つ」いわゆる棗玉状のものである。さらに側面は、横方向に研磨されているものがほとんどである。これらの事柄から、当古墳出土の白玉を篠原氏の編年を基に検討すると、5世紀の中葉にその製作年代が位置づけられることになる。

(4) 小結

愛宕山古墳の築造時期は、整理したことを基に総合的に判断すれば5世紀中葉という時期が考えられる。この時期は、久慈川周辺において調査された古墳の中では、古い段階に位置づけられる。当地において愛宕山古墳は、梵天山古墳をはじめとする大形の前方後円墳の築造から群集墳等の後期古墳の築造へと社会が変化していく過程の中で築造された古墳である。当古墳は、古墳の変遷やさらにはその後ろ盾となる社会の変化を考える上で良好な資料を提示したといえよう。

また、2基の埋葬施設を確認し、いずれからも副葬品が検出されたことから、被葬者は2名以上いたことが明らかになった。調査結果だけでは、これらの被葬者の社会的な地位や被葬者同士の関係には言及できない。今後、この地域での古墳の調査やそれに伴う資料の増加により、古墳に葬られた被葬者の社会的な性格や古墳の変遷も明らかになっていくと考えられる。

2 旧石器時代から縄文時代

旧石器時代の遺物としては、瑪瑙を石材とする石核が墳丘の盛土から、チャートを石材とするスクレイパーが表土中から出土している。石器の集中地点や遺構等は確認できなかった。

縄文時代の遺物としては、早期から前期にかけての土器片が数点と、この時期のものと考えられる石鏃が出土している。中でも田戸下層式土器が墳丘の盛土からまとまって出土している。墳丘の築造時に紛れ込んだものと考え、墳丘下の旧表土および下層にあたるローム層を試掘調査したが遺構は確認できなかった。

3 弥生時代

第1号土坑は、墳丘下の旧表土の下で確認され、そこから壺形土器が出土した。出土状況や土器底部の欠損状況から、土器棺墓の可能性を含めて調査したが、土器上部が欠損し大きさや器形が十分に把握できないことから、性格については不明とした。しかし、底部の欠損状況は、内から外へ人為的に穿孔されたものであり、土器棺墓の可能性が全くなくなったわけではない。土器片は、墳丘の盛土中から足洗式土器の破片が数点出土している。これらは、細頸の壺型土器の一部と考えられ、地文や沈線の施文方法から足洗1・2式に比定される土器である。

第1号住居跡は、長軸5.10m、短軸4.60mの隅丸長方形で、中央からやや北寄りに炉を持つ住居である。炉から炉石は検出されなかった。遺物は、広口壺、土製品（紡錘車）、石器（敲石）である。時期は、弥生時代後期後半（十王台式期）と考えられる。1・2は、口縁部と頸部の境にある隆帯がしっかりとした凹凸を持っていること、装飾に用いられる工具の櫛歯数が3ないし4本で多条化していないこと等を考えると、十王台

1式の土器であると考えられる。TP8は天王山式と考えられる高坏の破片で、南東部の攪乱された層の中から出土している。十王台式の破片は、調査区域内から多数出土しているが遺構はこの1軒だけであった。調査区域の南に位置する中坪遺跡からは、十王台式の土器片が表面採集されることから、何軒かの集落が南に広がっていた可能性が考えられる。

4 平安時代

竪穴住居跡を3軒確認した。いずれも柱穴を持たない小形の住居跡である。第3・4号住居跡は、墳丘の北側を掘り込んで構築され、竈を南東コーナー部に設けている。竈の構築方法は非常に簡素で、火床面の焼土もわずかに確認されただけである。さらに床面には硬化面が認められない。したがってこの時期、当地域は長期間にわたる生活の場とはならず、短期間の生活の場であったことが推測される。

註

- 1 赤羽横穴墓群報告書作成委員会 『赤羽横穴墓群 付篇 西大塚古墳群』 日立市教育委員会 1987年
- 2 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』 第八集 橿原考古学研究所 1988年
- 3 篠原祐一「白玉研究私論」『研究紀要』 第3号 財団法人 栃木県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 1995年

参考文献

- ・鈴木素行ほか「武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」『財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』 第15集 財団法人 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1998年
- ・小玉秀成「常総地域における弥生土器編年の大枠」『霞ヶ浦沿岸の弥生文化 - 霞ヶ浦町郷土資料館第21回特別展 - 』霞ヶ浦町郷土資料館 1998年
- ・大川清ほか『日本土器辞典』 雄山閣 1996年

写 真 图 版





愛宕山古墳遠景（北から）



墳丘確認状況（南から）



周溝確認状況（南から）

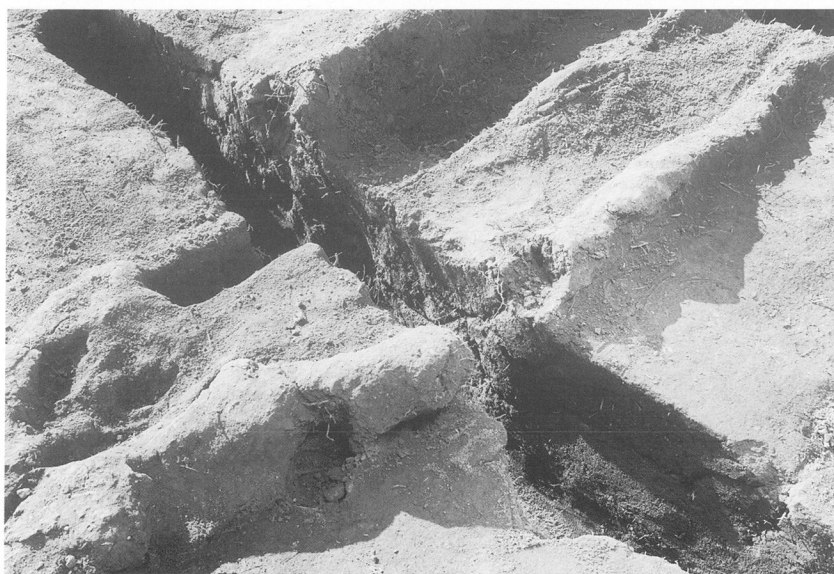
PL 2



第2 主体部確認状況

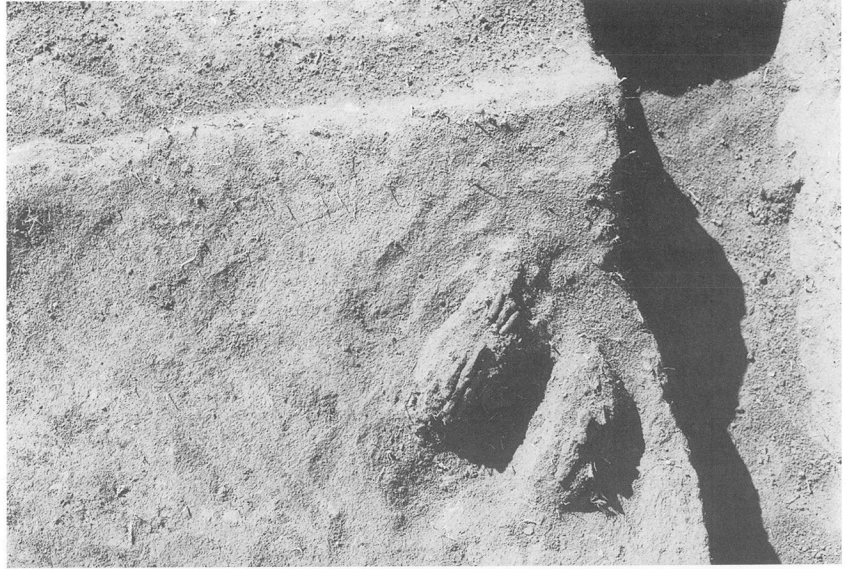


第1 主体部鉄剣出土状況



第2 主体部土層断面

第2主体部鉄鍬出土状況



第1・2主体部完掘状況



墳丘土層断面



PL 4



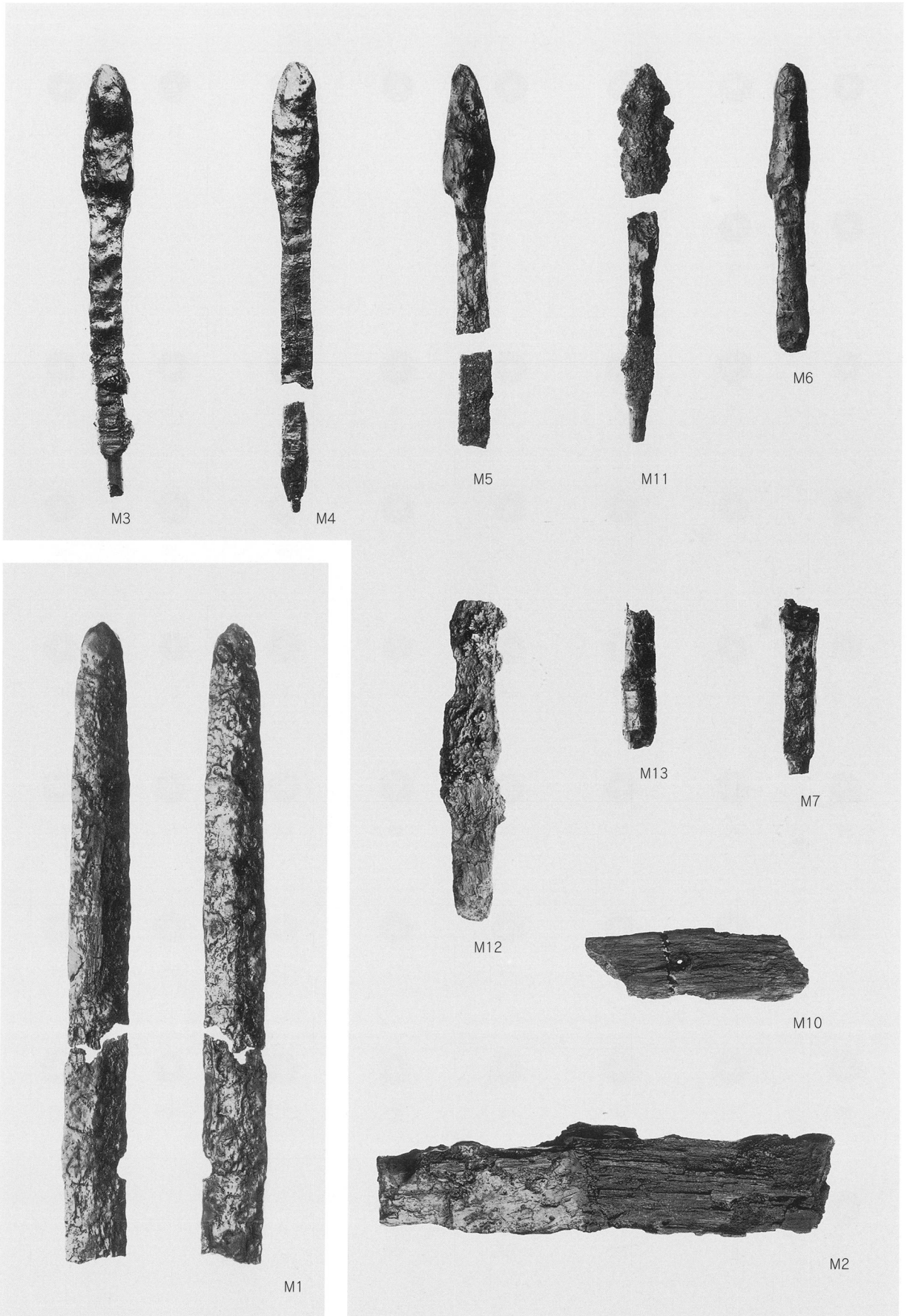
第 1 号住居跡完掘状況



第 2 号住居跡遺物出土状況



第 3 号住居跡遺物出土状況



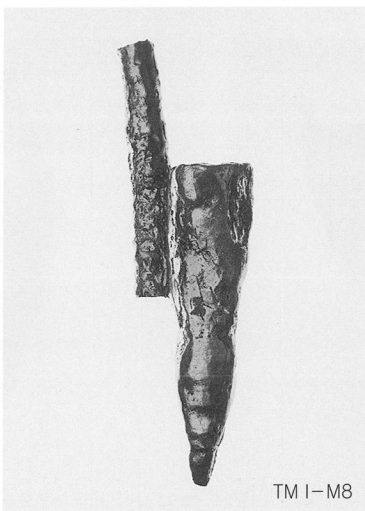
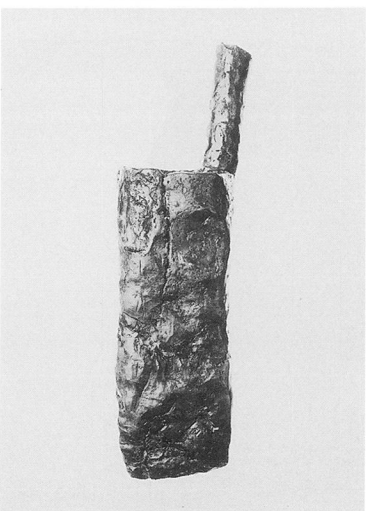
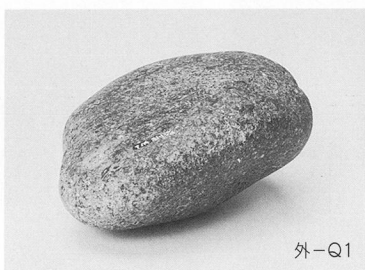
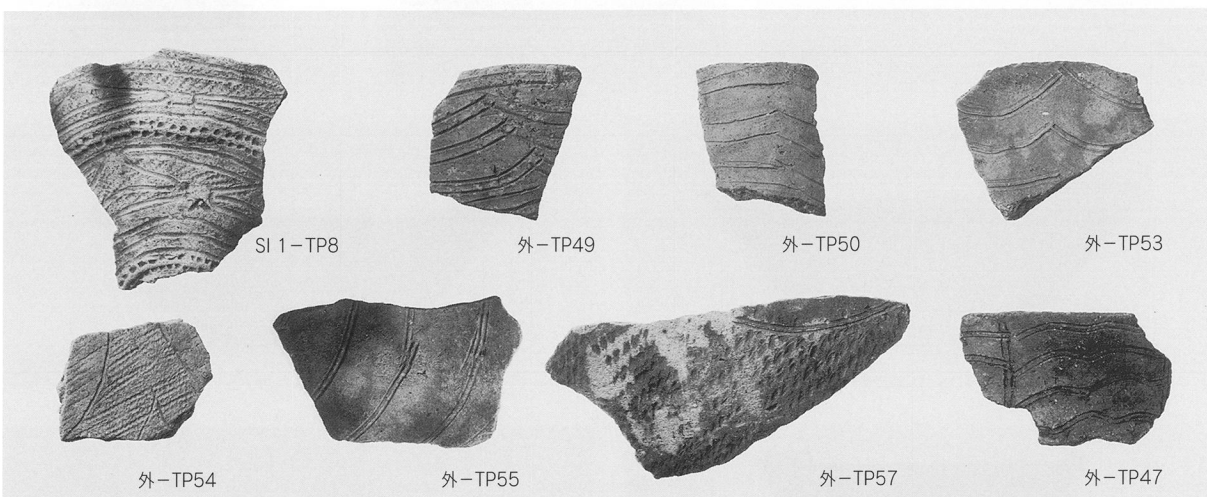
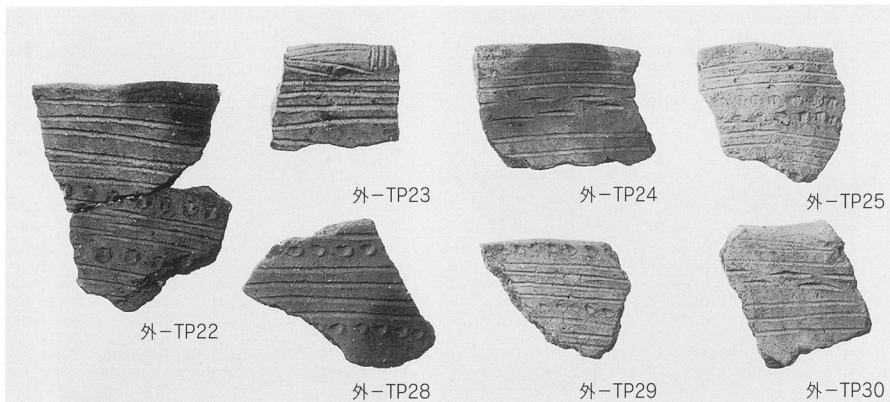
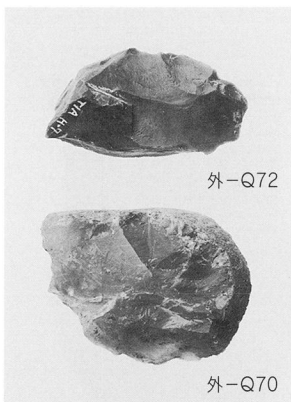
第1・2 主体部出土遺物(1)



第1・2 主体部出土遺物(2)



第1・2・3号住居跡，第3号土坑出土遺物



第1号住居跡，墳丘，周溝，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第177集

一般県道日立東海線道路改良工事
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

愛宕山古墳

平成13(2001)年3月15日 印刷

平成13(2001)年3月21日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

T E L 029-225-6587

印刷 株式会社きど印刷所

〒310-0913 水戸市見川町2558-21

T E L 029-241-2525